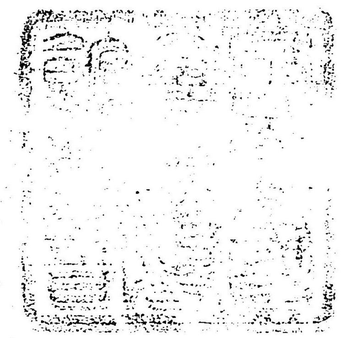
エトアーク

岡辰大福帳

谷孫六著

春秋社版

a 338
10



1817

はしがき

試みに辭書を繰つて見て下さい。

資本と云ふ字は、「金」だと云ふことになつて居ます。

その辭書を根本から覆したのは岡辰老人でせう。

岡辰老人は、資本は金だと云つて居ません。「あたま」だと云つて居ます。

「あたま」の働きが資本だとすれば、世間の人はみんな資本家です、資本のない人は一人も無い筈です。

さあ、その資本を働かせようぢやありませんか、岡辰式資本運用法は一文の金も要りません。

しかし、一寸待つて下さい。

岡辰老人は、もう一つあると云つて居ます。それは何でせう。誰も持合はして居ないものでせうか、いや、誰にもあるものです。

『それは腹だよ、君、度胸だよ、頭だけ働いたつて度胸がなければ駄目だよ』

老人は斯う云つて居ます。

して見ると之れも持合はして居るものです。有合せのものが役に立つ、これほど都合のよいものはありません。

ところで、どう頭を働かすか、どう腹を定めるか？

それは岡辰老人の話を聞いて下さい。老人は時々突飛なことを云ひ出しますが、つまるところみんな金の問題に觸れて來ます。

私は一々『なるほど〳〵』と云つて此本を書きました。

讀まれる方も屹度『なるほど』とお考へになられるでせう。私はそれが樂しみです。

谷孫六

目次

怪しからん日記……一

無料乘車の卷——二人で一人——前政府の穴——金なる哉、金なる哉——不思議な金貸——首の擔保二千圓

金づる探し……二七

極意の祕卷——金づる帳——六十萬圓茶話——正しき三千圓——遊ぶ金働く金——家主と銀行——鳥渡年十二割

金儲け競べ……五六

貯金のコツ——家計簿の祕密——からだが資本——金儲けの急所——狙ひ所摑み方——大滿足と大滿點

此の道彼の道……八七

妙な算術——三と一で四——金持三角術——不動の金縛り——二十兩の仕事——百兩の仕事——金儲けのコツ

貨殖虎の巻……一一七
商賣は地の利——新案店の設計——時間の利用法——一人前の食料——作力時代——もう一度考へる——知らぬ間の金——禮金の當然化

腕の投資術……一四七
生活費六十億——婦人の投資——金と事業と——失業者なし——素晴しい札束——街頭の黄金——手づる金蔓

黄金のジヤズ……一七八
遊んでる貯金——返へさない無盡——大きな利己主義——三割三分の利益——團結の威力——儲かる家作

幸運の鍵……一九八
機會を捉へる——健實な打算——幸運を捉へる——なつたら答案——三つの成功

生命の革袋……二一八
岡辰の失敗——保險と積立——保險料の割引——岡辰式計算——生命の借金——九十九錢で千圓

黄金五重奏……二四四
眼の着け所——金儲方程式——宣傳時代相——成功疑ひなし——材料の研究——八方睨み——金の七變化

百發百中錄……二七三
小判の草鞋——寄進の決意——金掘大明神——相場三略祕卷——金的の狙ひ方

幸運の星……二九一
相場は不可い——五圓で十圓——新式借金術——相場の名人——ロックフエラー——思はぬ成金

大儲けばなし……三一九
竹蜻蛉の元祖——釋尊のお告げ——流れる現金——フォードの月算——紙幣の買占

金的發矢錄……三四〇
電氣の發明——鰯に鯛の味——鐵道株の誘惑——神經衰弱の藥——田鱈目の會社——フイに十萬圓——株式新報の奉仕——株式賣買案内——これだ〳〵——十錢の金儲け

目次

闘戰術……三百五十萬圓――自分の金へ利息――一錢倍の緣起――社債と雞卵――家作と地所……三七三

金儲け實驗談

岡辰大福帳

谷孫六

怪しからん日記

無料乘車の巻

特急で下關へ發つた友人を送つて、東京驛の改札口を出ると、岡辰老人にパツタリ出逢つた。

「大へんお早いですな、何處かへ御旅行ですか」

「いやあ、今日は大失敗き、大阪から孫が歸つて來ると云ふから、それを出迎へて君のところへ廻はらうと思つてやつて來ると、僅か五分の違ひで歸られてしまつた、お蔭で入場券がフイさ……

しかし今日はこれが爲めに宜い學問をしたよ……君は家へ歸るのか、何なら一緒に行かう……」
「自動車が待たしてありますから、お伴いたしませうか」
「そいつは誂い向きだな」
岡辰老人と私は自動車へ乘つた。老人は掌で東京驛の入場券を遊ばせながら、
「政府なんてものはぞろつぺいなものだな、俺は鐵道大臣に注意してやらうと思つて居るんだ」
と、例もの調子で皮肉さうな眼を細くした。また何か發見したなと思ひながら、
「フイになつた入場券のことですか」
と、訊ねると、
「うむ、しかしこれは無駄にはならんさ、また使へるよ、だから俺は心配なんだ」
「どうしてですか……？」
「ねえ君、この入場券には無料乘車券と書いてありはしまいね」
岡辰一流の諧謔が芽を吹き出した。
「そんな馬鹿なことを……」

鼻の先へ驅け下りやうとする笑ひを制しながら、何を云ひ出すか知れない期待で、老人の横顔を盗んだ。
「だつて君、考へて見給へな、この入場券には日附が入つて居ないだらう。だから險呑なんだ、また使へる入場券、それは恐るべき犯罪を敎唆して居るも同樣ぢやないか」
老人の頰は熱して來た。
「どんなことですか」
「これがあれば、汽車賃を正式に拂ふ人が無くなつてしまふ。一刻も早く此入場券に日附を入れて貰ひたい、そして出來ることなら時間まで入れて欲しい」
「そんなに八釜しい問題ですか」
「こんなことを話すのは不愉快だが、實證が無ければお取上げになるまいから、俺の考へだけを話して置くが、これは君、この自動車の中だけの話にして置いて貰ひたいな」
「御尤もです」
「先づ手近な例で話すと、こんなことがある。これは日附を入れても、時間を入れても防止する

事が出來ない、先づ手荷物制限の問題から注意しなければならんね」

「荷物の方ですか」

「さう〳〵、先づ東京から横濱へ大きな荷物を特急で送らうとするんだね、正式にすると馬鹿な運賃だ、それを小僧に入場券だけを買つてやつて、客車の網棚へ乘せさせるんだ、特急は東京驛を出て横濱までは止まらない。横濱へ着いたら、横濱の小僧が入場券で入つて來て其荷物を下ろして行つてしまふ。それを看守して居る車掌さんがあるかしら」

「なる程、それは怪しからんですな」

「いや〳〵そんなこと許りぢやない、まだ重大な問題があるんだ」

岡辰老人は下唇を噛んで、何か考へて居るやうだつたが、思ひ出したやうに、

「先達、福島の競馬へ行つた時の話だがね、これなんか實に好い例だと思ふんだ」

と、腰を深くかけ直して私の方を見た。

二人で一人前

「先月の幾日だつたかね、福島に大競馬のあつたのは……？　あの時さ、恰度俺も誘はれて見に行つたよ、却々大がゝりなもんだね、すると仲の好い兄弟が俺の隣りに座つて居て、熾んにやつて居た、恐ろしく競馬の好きな兄弟と見えて、何處へでも押かけて行くらしいんだね、二日ばかりはうまく行つたんだが、三日目の大穴にすつかりやられてしまつたんだ。東京へ歸る汽車賃もないと云ふんだから、慘目なもんさ……すると其兄らしいのが、俺に向つて、誠に申兼ねますが東京へ歸つたら、屹度お返し致しますから、汽車賃を三圓貸して呉れと云ふのさ、見ると二人のやうだが、福島から東京へ三圓では歸れまい、と云つてやつたら、いやこれで結構なんですと云ふんだ、いくらか持合せがあつての足らずまいだと思つて三圓貸してやると、地獄で佛と云ふのはあの事だね、大そう喜んで歸つて行つた。東京へ歸つたら返すと云つたつて當になるもんぢやない、まあ呉れたつもりで忘れて居ると、感心なことにはそれから二三日して返しに來たよ」

「はあ、堅いですな」

「それが堅くないんだ、折角來たもんだから茶を入れて、いろ〳〵な世間話をした末に、時に先達の汽車賃はあれで足りたのかと訊ねたもんだ、すると其男は氣まり惡さうな顏をして、頭をか

いて居たが、旅の耻は掻き捨てと云ひますが、悪い耻ですから、實は今上野驛へ行つて代金を拂つて來たところです、と云ふのさ」

「汽車賃の後拂ひですな」

「まあ、そんなもんだ、しかし恁麼正直な男だから宜いやうなものゝ、狡猾い奴だつたら鐵道省はそのまゝ損なんだ」

「それでどんなことをして乘つたんですか」

「いや、どうも實に際どい藝當さ、福島から東京迄は二圓八十五錢だ、それへ三圓借りたんだから一人前の汽車賃で十五錢しか剩らない、其十五錢のうちで弟の方は十錢の入場券を買つて汽車へ乘り込んだもんだ」

「すると、兄の方は福島から上野までの正式の切符で、弟の方は十錢の入場券で乘つたと云ふのですね」

「さう〳〵、そこで二人は日暮里まで來ると降りちまつたんだ、さうして弟の方を構内へ待たして置き、兄の方は途中下車で一旦外へ出て、こんどは日暮里から上野までの切符を五錢で買つて這入り、其切符を弟に渡して、堂々と上野驛から降りて行つたんさ」

「いや、實に悪い手段ですな、しかし車中檢札があつたでせうな」

「うむ、そこまでは聞かなかつたが、その檢札と云ふ奴はどこからどこまでの間と云ふやうにきまつて居るらしいな、何でもよく知つて居る奴だつたよ……それは兎に角、途中下車をさせると云ふことが不可い、これは何とかして改正さしたいものだ」

「さうですな、目的地から目的地へ幾度用があつたからとて、其都度切符を買へば宜いのですから、途中下車なんて云ふものは、無くもがなでせうな」

「その通り、總て規則などゝ云ふものは、其裏を應用しろと云ふやうに出來て居るものだ。第一汽車の切符に途中下車だの、通用期間何日限りだと云ふやうなものは無駄なこつた、あんなものが書いてある爲めに、悪い奴はいろんなことを考へて困る、この通用期間なんて云ふものも、是非撤廢して貰ひたいもんだ」

「それでまた何かやつて居る奴があるんですか」

「さあ、それは知らない、しかしやれば出來ることだから、やつて居る人があるかも知れん、こ

んなことを知らずに居たら、鐵道省の收入は年に何百萬圓か減るだらうよ」

「へえ……そんなことがあるんですか」

政府の穴

「でも君考へて見給へな、通用期間と云つたところで、其期間中汽車に乘つて居なければならないと云ふことは無いだらう」

「そりやあさうです、途中下車をして名所古蹟を見物しようが、親戚の家へ泊つて居ようが、其期間中なら差支ない筈です」

「だから大間違ひのもとさ、通用期間中の切符なら、自分が持つて居なくとも宜いんだらう」

「と、申しますと」

「いや、其期間中は、其切符が何處を歩いて來ても差支ないだらうと云ふのさ」

「それは勿論です、只汽車へ乘り降りするときだけ係員に提示すれば宜いのですから……」

「あツはツはツは、それだから危險だと云ふのさ、本人が用達をして居るうちに、羽が生へて飛んで歩いても何とも云ふことが出來ないんだもの……」

いつも物々しい話に吊込んで置いて、ケロリと解決してしまふ老人の口吻は、こんなときも勿體つけて得意である。自動車は赤坂見附を下りて溜池の方へ曲らうとするカーブで恐ろしく動搖した。私の身體は老人の方へ押しつけるやうに腰掛を辷つた。

「何故そんなことを氣になさるんですか」

踏み止まるやうに身體を支へた私は、老人の顏を覗きながら云つた。老人は話の順序を暫く考へて居たが、

「日付のない入場券、途中下車、通用期間幾日間、これは鐵道省に是非共全廢して貰はなければならない、第一さう云ふことを利便に考へる乘客が何人あるか考へて見給へな、恐らく全人員の何分何厘だらう、その些細な人達の爲めに、惡用させる材料を麗々しく印刷して置くのはよくない、社會の風紀を紊すものだ……」

咳一咳、老人は咽喉にからんだ痰を吹つ切つた。

「今假りにこれだけの材料を以つて、鐵道省の穴とするなら、政府の損害は莫大なものであるこ

とを想像して、其一例を聞いて見給へ、戰慄に値するものがある」

老人の語調は改まつた。

「先づ君と俺と二人で大阪へ行くと假定して見ようぢやないか、其前に大阪の友人から梅田驛の入場券に鋏を入れたものを送つて貰つて置く、俺は其入場券を持つて、東京驛から大阪まで切符を求め、堂々と乘つて行く、これは君、檢札が來ようが何が來ようが差支ない、大阪に着いたら其切符は財布の中へ堅くしまつて、大阪の入場券で出てしまふんだ」

「なるほど……」

「そこで其切符を書留郵便で君のところへ送つてよこす」

「はゝあ……」

「君は東京驛の入場券を買つて汽車に乘る、もう入場券はいらないからどうでもよい、大阪の停車場から堂々と出て來る時は、改札口へその切符を渡せばよい」

「なるほど、何でも無い譯ですな」

「けれどもそれは良くないことだ、鐵道省としても斯うした犯罪を防止すべく、檢札掛を嚴重に督勵して居るだらうが、これに要する係員は何人居るだらう、その方の事はよく判らんが、一列車の中に二人づゝ一日交代として四人置くとすれば、約五千人位、いやもつと要るかな、此人達の月給七十圓平均と見て、五千人なら三十五萬圓、年額四百二十萬圓と云ふ看守費だ、馬鹿に出來ないね」

「して見ると、入場券の改正、乘車券の通用期間、途中下車を全廢すれば、此看守が約半分で濟むと云ふ譯ですな」

「或はさうかも知れん、政府も極端な緊縮方針を取つて居るやうだから、かうした人員をもつと能率的な方面へ振り向けて行つたら、相當に成績が上がるだらうと思ふ」

恰度旣動車は家へ着いた。老人は先へ降りて格子戸を開けた。

金なる哉、金なる哉

「君濟まないが手拭を貸して呉れんか、今朝寢起きで飛び出したもんだから、未だ顏も洗はないんだよ、一ト風呂浴びて來よう」

「何なら家の風呂を炊きつけませうか」

「いや〳〵洗湯で結構、この二三軒先にあつた筈だつたね……なに？……湯銭？……持つて居るよ、この紙入れを預つて居て呉れないか、幾らも這入つて居やしないがね、それから手帳……と、この手帳を讀んで見給へ、噴き出すやうなことが書いてあるぜ、それでは一寸失敬する」

いつも元氣な老人は、一人で喋舌るだけ喋舌つて洗湯へ出掛けて行つた。

面白い手帳……私は興味を持つた。いつかも老人の留守宅で讀まされたが、それが頗る面白かつた。

「どんなことが書いてあるだらう」

玄關先に立つた儘、許された手帳を開けて見ると、「怪しからん日記」と第一頁にある。

「標題が素的だな」

と思つた。

＊　＊　＊　＊

それは近眼だからと云ふ譯ではない、地面を見て歩くからと云ふ譯でも無い、ものゝ二間とも離れない往來に、丸い光るものが置かれてあつたとしたら、どうするだらう。

大抵の人は吸ひ付けられたやうに立止まるに相違ない、さうして先づ四邊を見廻はす、しかし其時の態度は、一層の落つきを見せて、從容せまらざる姿勢を強ひて整へながら、其丸い光るものに向つて、からだ全體を眼にしてしまふ。

慥にそれと合點が行つた時、彼はどう云ふふるまひをするであらう、一足、二足、何氣ない風に装つて、彼れ光る丸いものに向つて接近する。此場合もし其ものに聊かの疑ひでもあらうものなら、先づ靴の先で偵察を試みるであらう。

「サイダーの口かな、鉛のメンコかな」

彼れの判斷は全神經を酷使する。もしもそれが、自分の判斷に正しき肯定を得たなら、彼れは如何に體裁よく、如何に要領よく、之れを收受しようことに工夫しなければならない。而も白晝公然たる街路の中央に於て、彼れは何等の勞力を費す事なしに「金五十錢」を得られるのである。往來は自動車、人力車、荷馬車、オートバイ、走馬燈の如き活動である。しかく衆人環視の中に、彼れ一人の視線に入つた丸い光る物體は、全く彼れを法悦のとばりに包んでしまつたの

である。

それはサイダーの蓋でもなく、鉛のメンコでもなく、正しく昭和四年鑄造にかゝる五十錢の銀貨である。彼れのこめかみに於ける神經は滿悅の躍動を試みた。彼の指端に於ける末梢神經は百パーセントの隨喜に亂舞した。けれども彼は衆人環視の中に於て不勞所得を敢てする羞恥を感ずる良心は持つて居た。

「不勞所得の合理化」

いまの資本家達の考へさうなことにしばらく惱まされて居た彼は先づ左のポケツトからハンケチを取り出した。さうして稍々汗ばんだ額を拭つた。フト氣がついたやうに彼は靴の先を見た。靴の先のエナメルは今朝オレーフ油を塗つたばかりで燦然として居る。けれども其テカ〳〵して居る表面には、こまかな埃が鶯餅のやうについて居た。

ネクタイの新らしいのと、靴の先の清潔なのが社交の一大要訣と心得て居る彼は、この白晝往來の眞ツ只中でも、此靴の先が氣になつてならなかつた。彼はもう一つのハンケチを取り出して靴の先を拭つた。

彼の靴の先は再び今朝玄關に並べられた時の樣にテカ〳〵した。彼は躍然と歩き出した。しかもやゝ反り身に——そして左の手の親指をチョツキの袖つけに挾んだ。輕い口笛さへも吹かれて居た。

——と、丸い光るものであるところの、昭和四年製五十錢銀貨は。何時の間にか往來から影を失つて居た。

云ふまでもなく、彼の五十錢銀貨は、斯うした機智と策謀とを敢てせしめたのであつた。僅か五十錢銀貨一枚の爲めに、全力を捧げねばならぬ人間の腦味噌を、神はあわれと思召すだらう。けれども事實「錢なる哉、錢なる哉」の世界である。

落ちた錢を拾ふのでさへ、如何に要領よく、如何に體裁よく、そして合理的にしようとするのが人情であるが故に、應接室が光りかゞやいたり、待合の深更に絃歌が湧くのである。一體社長室だの重役室だのと云ふものは、如何に體裁よく、如何に要領よく金を儲けべきかと云ふ策謀室に異ならない。

「それ程困るなら貸してやらうではないか」魚屋の亭主のやうに、脂肪で太り切つた、糖尿病の

疑ひのあるやうな眼つきをした社長が、少し笑ひかけて廻る椅子を捻ぢ向けた時、借りに行つた彼れの目は異様に輝いた。そして恐る〳〵彼れは答へた。

「しかし擔保もなし、抵當にすべき物件もございませんので、御無理なお願ひとは存じましたが仕事が仕事だけに、これを見越してお貸し願ひたいと思ひますので……」

彼はまるで初會の無盡でも引くやうに、もしひよつとしたら、當らぬものでもないと思ふのであつた。壁の向ふには此社長のお父さんでもあらう、籠に禿げた、下顎が二重に飛び出して眼の長い、耳たぶの大きい引伸し寫眞がかゝつて居た。其下の百目簞笥のやうな古臭い引出しに幾つも〳〵口取紙が張られてある。其側には此室には相應くない白膏の裸體像が左の手を弓なりに上げて、くの字に横に反つたまゝ自分の踵を見下して居る。扁額は餘程古い人が書いたと見えて落款も印章も判然と判らないが「錢體乾坤象」と鮮かに、如何にも高利貸會社の社長室らしい。

「君煙草を持つて居るかい」

此社長常に云ふ、「優越なるものは敵に弱點を與へよ、彼れ親しまん」と此邊の呼吸は誠に馴れたものである。彼は引いた籤を羽織の紐へ結んだ時のやうな心持ちで、敷島を箱ごと提供した。

社長は其中から一本拔き取つて無雜作に吸ひつけながら、

「そこで其荷は何時東京へつくのだ　荷がつきさへすればハさんが仕切つて呉れると云ふのだネ、ふむ、ふむ」

社長は半分ばかり一氣に敷島を吸ひ減らした。

「左樣でございます、これは私の一世一代の商賣でございまして、この荷が捌けさへすれば、舊債の方もどうにか片がつきますし、さうした上に、多少手許も樂になりますので……」

彼は茲を先途と懸命である。社長の腹にはどうするかと云ふ度胸だけは既に据つて居るのである、一體金貸しなどと云ふものは、第一印象で可否を決する判斷がなければならない。

「よし、貸してやる、擔保はあるな」

社長は眼鏡越しにじろり眺めた。彼れは消えも入りたい腰を、もう少し縮めて、

「その擔保がありませんので、此仕事を引當てに願ひたいので御座いますが……」

「ようし判つた。だがしかし擔保がないと貸されん規則だから、擔保だけは入れてな……」

「その擔保と申しますのは……」

「判つたよ、擔保は君が持つてるものでよろしい」

「持つて居るものと申しましても、此時計は十八圓五十錢の特賣で買ひましたもの、指環は中症にかゝらないやうにと申しまして、文錢を七ツ餝り屋へやつて一圓五十錢で拵らへて貰ひましたもので！　その外にこれと云つて差入れますやうなものがございませんが……」

「ようし判つた。擔保はあるよ、貸して上げるから明日の午前中においで、わしは用事があるから、失敬する」

社長さんはプイと立つて、無雜作に襟卷をくる〳〵と卷きつけながら扉を開けた。しかも最前提供した敷島は、心なしかポケツトへ入れて行つてしまつた。

不思議な金貸

金貸しなどと云ふものは、金を貸すのが商賣である。借り手がなければ商賣にならぬ。之れと見定めた借り手がつけば、無理にも貸すのが商賣である。抵當なしで、擔保なしで貸さうと云ふからには餘程の見込があるだらうと考へた彼れは、自分の仕事に裏書されたやうな嬉しさでホクホク家へ歸つた。そして、さうした時には誰でもさう云ふ氣分になる一合を晩餐の卓に賑はして、晴れ晴れとした顏を妻や子にまで分けてやつた。

「何しろあの極道社長が擔保なしで貸さうと云ふのだから、今度の仕事は萬歲だよ」

並んで居る子供までが何とはなしに明るさうな話に醉はされて、「お手々つないで」などを唄つたり「ポッタン〳〵」を踊つたりして團欒の一夜を過した事である。

翌る朝、彼は元氣よく飛び出した。そして十箇入りの敷島一箱を手土產として彼れ社長の應接室へ通つたのである。

油ぎつた社長は獵虎のチョツキに太い金鎖りを見せて入つて來た。

「君！　千圓だツけネ、お約束通り只今上げます、そこで擔保の事ですがネ」

とまた眼鏡越しに見るのである。彼れは今朝まで擔保の事などは考へて居なかつた。擔保のない事は昨日もあれ程吳々も云つて置いたのだから、今になつては冗談だと許り思つて居る。

「へエ」

と返事だけしてケロリとして見せた。社長はそんな事には一向お構ひなしで、黑い大きな鞄か

ら公債のやうなものを一把持ち出した。

「さア君に擔保を貸してやる、記名式五分利公債が二千圓」

と抛り出した。抛り出された彼れは飛上つた。けれども公債ではどうしようもなかつた。

「あのう、現金に願はれませんでせうか」

膝のあたりで揉み手をしながら、彼の目は哀願に滿ちて居た。

「ようし、現金にしてやる、しかしこれは擔保として貰つて置くよ」

彼は狐につまゝれたやうに、何が何やら判らなかつた。自分の鞄から公債を出して、之れは擔保として貰つて置くよ、現金は貸してやる。一體氣でも違つたのではあるまいかと思ふより他なかつたのである。

「それは、一體どう云ふ譯なのでせう」

彼れは社長のする事の總てが狂人の沙汰ではなからうか、して見るとうつかり取引したら面倒だと思つたので。貸借の事などはそつちのけの質問を發して見た。

「不思議だらう、君、ハツハツハハ、しかし心配せんでもよろしい。氣が狂つたのでも何でもない。金貸しは金を貸すのが商賣だ。君なら慥かだと思つたら、どんな事をしても貸してやるのが商賣だ。君の仕事はどんな甘い仕事かは知らん。わしは金を貸しさへすればよろしい」

從容せまらざる彼れ社長の態度は天晴れ金持ちに相應しい堂々たるものであつた。

「そこでわしの會社では、擔保なしに貸す事の出來ない規則になつて居る。だから君に此公債を擔保として貸すのだ。そして現金を貸すのだ」

彼れにはそれが判らなかつたのである。擔保を貸す、金を貸す、それ程自分が彼れに取つて厚き信用を得てゐるものとは思はれない。その理由を聞き出す事の興味が彼れ自身をつゝんでしまつた。けれども借りる事の切迫つまつて居る事だけは忘れる譯には行かなかつた。

「有難うございます、お禮の申上げやうもございません、それにしても……」

「おつと、そんなに禮を云ふには及ばん、君には立派な擔保があるんだ」

彼れは益々迷宮に入らざるを得ない、貸す事が商賣、君には擔保がある。一體自分にはどんな擔保がある。

「一體私にある擔保と云ふのは何でございませう」

變な事を訊ねると思つたが、彼れはたうとうこんな事を訊かねばならなかつた。社長は今更氣がついたやうに、大きく笑ひながら、

「君、擔保と云ふのは君の首だよ」

首の擔保二千圓

もし椅子がなかつたら、彼は美事に尻持ちをついたのであらう。糸のゆるんだ繰り人形のやうに彼れの身體はヘト〳〵となつた。

「私の首ですつて、くび……？」

彼は平手で、自分の首を撫で〻見た。そして、

「此首を擔保にして、どうするんです」

社長は冷然として、驚異にうつ〻を拔かして居る彼を瞰下しながら、

「君がもし義務を果さなかつたら、其首を貰ふばかりさ」

「此首を何にします」

「別に何にすると云ふ事は無いが、君が不自由になるばかりさ」

「それでは此首の骨を折つてでもしまふのですか」

「そんな首の骨を折つて、どうするか、まアそれ程不思議に思ふなら、其手續きを聞かして上げよう」

社長は居ずまひを直して儼然とした。彼れは驚愕そのまゝの姿勢で、此珍妙なる金貸し術と不可思議なる商賣の謎を解くべく、兩方の耳を動かした。

「ねえ君、君に此公債二千圓を貸すだらう」

社長は耳のそろはない公債を、机の上でトン〳〵と叩きつけながら

「これは記名式だからみんな君の名義に書き換へてしまふのだ、そして其番號と君の名とを一の調書につくり上げて紛失屆を出すのだよ、日本銀行へ……宜いかネ、そして其再交付を願ふのだ、再交付されたものはわしの名義に書き換へてしまふ。それで判つたらう」

「ヘエ、ヘエ」

と彼れは漢學の先生から孫子の講義を敎はつて居るやうな恰好で、返事はしたもの〻、判つた

やうな、判らないやうな返事をして見せた。流石に商賣である。彼れ社長は此重大なる意義を徹底的に呑込ませようとするのである。

「その紛失屆を出した公債が君からわしに擔保として入れられるのだ、判つたかネ」

彼れは漸く判つた。しかしまだ判らない大きな點があつた。

「ヘエ、判りました。しかし紛失屆を出した無効な公債を擔保に取つて、あなたはどうなさるおつもりですか」

社長は、こゝぞとばかり大きく笑つた。

「それだよ君、それが眼目なんだよ。萬一期日が來て、君が此義務を果さなかつたら、無効な公債を擔保に入れた君は其筋が許して呉れないよ、つまり君の首に繩がつくのさ、それが擔保になると云ふものさ」

彼は大きな團子を嚥み込んだやうに、ユツクリと大きな音を咽喉にさせた。さうして丁寧にお辭儀をして帽子をかぶつた。

* * *

* * *

茲まで讀んだところへ老人が歸つて來た。

「どうだ君、不思議なことが書いてあるだらう、金を貸す奴も借りる奴も考へることだね」

「さうですな、さつきの汽車の話と云ひ、この日記と云ひ、まるで法規を無視したことばかりではありませんか」

「だから、怪しからん日記なんだ、そんなことで金儲けなんか出來はしないよ、けれども老子と云ふ人は旨いことを云つたね、道の道とすべきは常の道にあらず、と、慈じ道と云ふものがあるから人間は窮窟なんだ」

額に浮んで來る汗を二三度拭つた老人は、

「大磯に引籠つて、憲法を作り上げた伊藤博文公も、まさか勳章を賣る奴があらうとは氣が付かなかつたらうな」

腹の皮だけへ波うたすやうな笑ひ方をして、

「だから君、あんな大それたことをしたつて、濱職罪と云ふ、つまらない安官吏が御用商人から五圓の切手を貰つたのと同じやうな罪にこじつけてしまはなければならないぢやないか」

岡辰大福帳

「なる程、これは怪しからん日記ですな」

金づる探し

極意の秘巻

「いや、恰度宜いとこへ來て呉れたよ、いま君のとこへ手紙を出さうと思つて居たんだ、面白い問題があるんでネ……さあどうぞお上り……」

晒布の襦袢一枚で、座敷中を何かくれくれ動いて居た岡辰老人は、急に浴衣をひつかけながら、愛想よく座敷へ招じて呉れた。

「何です面白い話と云ふのは……？　また何かうまい儲け話ですかな」

ほんとうに恰度宜い所だつた。老人から話しかけようとする問題なら、何かまた新らしい發見があるのだらう。と込み上げて來る期待を、白扇の數に泳がせながら、額の汗を手巾でそつと拭つた。岡辰老人はいつものニコ〳〵さで、

「なあに、珍らしい問題ぢやないがね、どうだいこの不景氣は、恐れ入つたね、當局の所置よろしきを得て、日本銀行の金はボツ〳〵減つて行くし、物價は下るし、月給は下るし、暮しにくゝなつて來たね」

例の皮肉がまた閃めき出した。

「物價が下れば暮しよくなるんぢやありませんか」

どうせ何か話さうとする老人の前提と見て取つたので、月並みな質問で話のつゐを引つぱつて見た。

「ところがね君、物價が下がると云つても一齊にぢやないんだから、物を買つて生活しなければならない人達にはとても苦しいんだ、これは別に特殊な問題として論及するほどでもないが、不景氣と云ふものは、物價の下がる時に來るもんなんだ」

「なるほどね、して見ると物價の上る時が好景氣と云ふことも出來ますね」

「さう〳〵、その實例としては支那を見給へ、銀の暴落で大へんな騒ぎをして居るが、上海あたりの景氣と來たら素晴しいもんだぜ」

「へえ……？　あちらはそんなに好いんですか」

「上海方面ではいま安い銀で土地や家屋の買占めが熾んに行はれて居る。つまりこれから物價が上らうとして居るんだ、うまい金儲けがあるらしいな」

「そんなに素晴しいなら上海へ乘り出して見ますかな」

「そりやあ今だぜ、何しろ日本の金が一圓で一圓六七十錢にも使へると云ふのだから、第一生活も安くあがる筈だ」

「なるほどね、そんなのを利用して儲けて居る人もあるでせうな、しかし何としても海を越えて支那までと云ふと少し憶却のやうな氣もしますが……」

「なあに、何でもないさ、日本に居たつて出來ることだ。ある雜誌の代理部では態々上海まで出張さして大そう儲けたさうぢやないか」

「何でそんなに儲けたんです……」

「麻雀の牌を上海から取寄せてね……」

「麻雀で儲けたんですか」

「いや〳〵、麻雀の牌を上海から買つて來て賣つたんだ」

「それで……」

「何しろ、一萬圓で二萬圓近くのものを買つて來られるんだからな」

「なるほど……！　うまい儲けですな」

「たから君、金儲けと云ふ奴は考へると何でもないだらう」

日盛りの夏の眞ツ日は亞鉛屋根をヘコヘコさせる程照りつけて、軒先に吊した簾越しに　緣側の瓶で、精一ぱい開き切つた慈姑の葉へ、面白い縞目を作つて居る。

「いや此處は暑いな、丁度日がこつちへ廻つたところだ、少し取散らしてはあるが他の人ぢやなし、御免蒙つて彼方の座敷にしようかな、今日は朝からジリ〳〵しさうな天氣だから、虫干を始めたところさ、なアに、別に大したもんぢやないがネ、古い帳面だの書附だので、要らないもんだけど、折角取つて置いた書類だから、ざつと風だけ入れて置かうと思つてネ……」

なる程、其處には、老人一流の横綴の帳面で、例の押切帳だとか、大寶惠帳だとか、入船帳だとか、金づる帳、虎の卷と種々な名前のつけられたのや、古い氣配狀の綴りや、手紙の古いの、卷物のやうに束になつた書附、和本の塵劫記、論語、孟子、史記、孫子と云ふやうな種類のものが、二枚程の戸板に並べられてあつた。

「岡辰極意の祕卷と云ふところですな」

と、暫く立つたまんまで、珍らしい興味にかられながら、岡辰老人の顏を見た。

金づる帳

一緒に立つて居た老人も、懷かしいやうな目つきで、今更らしく戸板の上を見廻して居たが

「さうさネ、さう云へば之れでも俺に取つては、戰場往來の記錄なんだからな……」

と、つく〴〵らしいことを云つて、

「おい、誰か居ないか、お絞りを持つて來て上げな、それから冷たい麥湯とな……どうです、上衣を脫いだら……いつそのこと裸になつて拭いて來ちやアどうだネ、何しろ今日の暑さは別だよ」

と、親しみのある目を呉れながら、座布團の上へ胡坐をかいた。そして例の長煙管へ手際よく刻みを詰めて、卷線香の火を吸ひつけた。私も上衣を脫いだまゝ、座布團の上へ御免蒙ることに

した。老人はうまさうに一服吸つて、灰吹をポンと鳴らすと同時に、腰を落すやうにして、

「實に不思議だ」

と、呟いた。怪しからん日記の續きであるとばかり考へてしまつた私は、盜むやうに老人の鼻の先を見た。

冷たく絞つた手拭が來る、麥湯が來る、私は夫等へ一々會釋して

「何です、不思議と云ふのは……？　例の汽車の切符ですか……」

と、徐ろに敷島を一本拔き取つた。

「それは當局者に與へておく謎として、俺達の知つた事ぢやない、けれども有り得る奇蹟を如實に思ひ出したんで疑問なんだ。なアにネ、先刻虫干の序に、古い帳面を見るともなしに見て居ると、大正三年の帳面に、フト吸ひつけられてしまつたんだ、それから種々考へて見たがどうも俺にはうまく判斷がつかない、そこで考へついたのが君さ、君は新らしい學問をやつて來たんだから、法理上どう考へるか、それを訊ねて見ようと思つてネ、それで手紙を書き初めたとこへ、君の聲がしたもんだから、裸のまゝで飛び出した始末さ……」

「はア、また不足稅もんですかネ」

と、輕く洒落て見せると、老人は頭をかきながら、

「あはツはツは、まアそんなもんだな、しかし君、無から有を生ずると云ふことは、魔術だつて出來ないことなんだ、どんな上手な手品師でも、ちやんと種の供給者があつて、手際よくやればそれで喝采と來るんだ、ところがまことに不器用な手際で、醜態の限りを盡して金を儲けたと云ふのだから、どうも俺には腑に落ちないんだよ」

岡辰老人の疑問はだん〳〵深刻になつて行くらしい。

「なんです。そんなに御困りになつて居られる問題は……？」と訊ねざるを得なくなつた。すると老人は立上つて、戸板の上から古ぼけた「金づる帳」と云ふのを持つて來た。そして丁寧に頁を繰つて居たが、思當つたところらしい頁の皺を伸ばして

「これだ、例の有名なシーメンス事件さ」

シーメンス事件と云へば、海軍收賄問題として、山本內閣が倒れた大事件である。中心はコンミツションに依つて捲起された醜事件である。

「しかし、あれは軍法會議で段落がついたんぢやありませんか」
「そこだよ、俺の云ふのは……其のコンミツションの問題ぢやないんだ」
と、岡辰老人は膝を進めた。

六十萬圓茶話

「何しろあの時の軍法會議と云ふ奴は辛辣だつたネ、最初の判決が大正三年五月二十九日、海軍中將松本和、同大佐澤崎寛猛、同造兵中監鈴木周二等に關する判決左の如し」
と「金づる帳」の頁を煙管の先で追ひながら、
「どうだい、赤坂氷川町七番地平民、待命海軍中將、正四位勳二等功三級、松本和、被告を懲役三年に處す、金四十萬九千八百圓は之を追徵す、押收書類は之を差出人に還附す、とある。續て澤崎大佐が懲役一年、追徵金一萬一千五百圓、海軍造兵中監鈴木周二、之は免訴と、次に藤井少將懲役四年六ケ月、追徵金三十六萬八千三百六圓五錢、と素晴しいもんぢやないか、松本中將と藤井少將とだけで取つたコンミツションが、七十七萬八千百〇六圓五錢だぜ」

と、目を丸くして見せた。
「しかし、それは追徵金として取上げられてしまつたんでせう」
「そこだよ」
岡辰老人の眉宇は輝いた。
「俺の疑問はそこなんだ。しかし之れは御本人がやつて居ることかも知れない、またそんな話も噂で聞いたやうな氣がする」
と前提して
「其追徵金だネ、四十萬圓も三十六萬圓もコンミツションとして取つた時に、其儘銀行や手許に置かないで、何か他のものを買つてしまつたらどうする……？」
「それは矢張り追徵されてしまひます」
「げれども、其中の誰だか、其金で郊外の方へ地所を買つて置いたんだ」
「だが、それは取上げられてしまつたでせう……？」
「そりやアそうだ、追徵金の判決を受けると同時に、手許金や銀行のものは全部徵收され、其不

足金額は、其地所を賣つて支拂つたとある。ところが、判決が濟むまで何年かゝつて居たと思ふネ、明治四十四五年から大正三年五月迄の間だ、東京はだん〳〵開けて來る。地價は上る。結局其地所の一部分を賣つて、立派に追徵金が出來たと云ふことになつてしまつたのだ」

「なる程……」

「その後へ殘つた地所はどうなる、と云ふのが俺の疑問なんだ。軍法會議の結果、命令された追徵金は立派に支辨した、けれども後に殘つた地所は自分のものだ、その元金は追徵さるべき性質の金であつた、と云ふのだ、まさか司直の手が、其處まで延びる譯には行くまい。それともそれは追徵金として例令何十萬圓でも取上げてしまふのかどうかと云ふのだ」

と、やゝ昂奮の色を見せて

「今假りにだネ、其四十萬圓で坪當り一圓の地所を四十萬圓買つたとするネ、それが三年後に二圓五十錢で賣れたとしたら六十萬圓と云ふ金が出來てしまふ。それを日本の法律はどう裁くかと云ふのさ」

岡辰老人は詰問的である。

「なる程……しかし、それは人道問題です、潔く其處分を考慮すべきです」

「あツはツはツは、苦しい答辯だネ、よろしく法規を改正すべしだネ」

と、岡辰老人は、たわいなく笑つてケロリとした。かと思ふとまた急に眞顏にかへつて、

「ところで君、今の問題は醜き事件の解剖で、我々のなすべく欲せざるところであるし、又斯くの如き例を範とするには、地位も名譽もかなぐり捨てゝの事であるから、實例としての茶のみ話に過ぎないが、之れに依つて金と云ふものは一時でも遊ばして置いてはならないと云ふことだけは判つたらう。そこでもう一つ俺に判らない疑問があるんだ」

恐ろしく疑問の多い日である。

「しかし、これはそんな事件ぢやないんだ」

と、老人は話をつぎ足して、麥湯の代りを命じた。

正しき三千圓

「特に名を祕すが麻布のある華族樣の家で起つた事件だがネ……」

岡辰老人の事大的な話頭はもの〳〵しく口を切つた。

「お姫様の御婚約が成立つたんでネ、上を下への御目出度さ」

何を云ひ出すのか、いつも探偵小説のやうな冒頭を置く老人の事だから、どんな事件が中心になつて展開するのか、稍興味を持つて耳を傾けて居ると、

「何しろあの邊になると俺達の家と違つて大へんなもんだよ」

恐ろしく出し惜みをする話である。老人は顎の先をつまみながら、

「御仕度だけが十萬圓と云ふんだからな、素晴しいぢやないか。そこで執事のFと云ふ男が調理萬端を承り、三越へ出かけて、萬事遺漏なく總ての準備をしたんだ」

好い加減に本文へ入つて呉れゝばよいもどかしさで、耳の後を掻いて見せると、見て取つた老人は、それと悟つたか、

「はツはツはツは、少し手緩い話だな、しかし順序だから聞いて呉れ。何しろ十萬圓もの御仕度だから大へんだよ、自動車で何臺運ばれたか判らないんだ。兎に角三越からは十萬圓の領收書と品物だけは完全に届いた。然るにこのFのふところに現金三千圓の金が殘つて居たと云ふから不思議だらう」

合點が行つた、老人の話は此三千圓が中心だつたのである。

「はゝア、海軍事件ですな」

先刻のシーメンス問題は、此話題の伏線であつたらしく考へられると同時に、思はず斯う答へてしまつた。すると老人は大袈裟にかぶりを振つて、

「三越には十萬圓支拂つてある、品物は十萬圓だけ届いて居る。其間微塵も怪しげな取引などは行はれて居ない、それだのに三千圓の金がFの懐ろにあるのだから不思議ではないか、そこでFは考へたんだネ、これは主人に返すべき性質のものかどうかと云ふことを……」

「値切つてまけさしたんですか」

「いやさうぢやない」

「十萬圓もの買物ですから、三越からの謝禮ですな」

「それぢや、シーメンス問題と變るところがないぢやないか、けれども此買物に依つて生じた三千圓であることは事實なんだ、そこで此儘に猫婆してしまへば、Fは背任になるか横領になるか

詐欺になるかと云ふ問題だ、そこが俺に判らない疑問なんだよ、矢張り海軍問題のやうに査問會へ廻すべき性質のものか、其儘Fの銀行へ預けてしまつても差支がないものか、これを判斷して貰ひたいんだ」

「いつたい、どうして生れた三千圓なんですか……？」

「一寸したことさ、Fは主人から十萬圓の金を預つて三越へ行つたんだ、すると途中で考へたんだネ、自動車を二三軒廻らすことにして商品切手交換所へ飛び込み、三越の商品切手を十萬圓だけ買入れたんだ。その切手を持つて三越へかけつけて、完全に十萬圓の買物をしたと云ふのさ、つまり十萬圓の現金を商品切手交換所へ行つて商品切手と換へて行つた事だけなんだ」

「なるほど……」

「そこで三千圓の金が出來た譯だ、商品切手交換所では五分引位で買つて三分引位で賣つて居るんだから、三分引即ち三千圓の金が出て來たらう。その金さ……」

と、老人は手柄さうに鼻へ小皺を疊んで、

「で、君此三千圓をどう思ふネ、これは三越でも何等影響のない三千圓、御主人の方にも何等損害のない三千圓なんだ、この損害を支拂つたものは、三越にも主人にもFにも何等關係のない第三者なんだぜ、即ち五分引で商品切手交換所へ賣つた奴が、交換所へ二分、Fへ三分とわけて呉れたんだ」

「なる程、Fの所有として恥づるところはありませんな、しかし十萬圓となると大きなものですネ、三千圓と云ふ大金が絶無からヒョコリと生れたんですから……」

「十萬圓で三千圓、一萬圓で三百圓、千圓で三十圓、百圓で三圓とな……」

と、老人は例の目の子算を逆にやつて、

「百圓の買物でも、この手でやると、親子三人の立派な晝飯が食堂で只出來てしまふと云ふものだ。其御馳走を見ず知らずの人が拂つて呉れて居るんだから世の中は妙ぢやないか」

岡辰老人は、會心らしい笑を泛べながら、

「どうです、海軍收賄事件とどう違ふかネ、立派なものだらう、之れこそ無から有を生じた機轉の金儲けと云つて差支あるまい。何しろ考へる奴にはかなはないよ」

「さうですな、一寸した事ですが……」

「その一寸した事で、まだ素敵なのがあるんだ、これは俺の實驗談だが……一つ傳授しようかネ」
表を定齋屋がカタ〳〵さして行く、自轉車のベルが鳴つて行く。日盛りである。

遊ぶ金働く金

「どうだ君、冷麥でも取らうか、今日は久し振りだから、ゆつくりして行つても宜いだらう、何しろ此日中ぢや表はたまらないよ」
と、老人は立上つて「金づる帳」を元のところへポンと拋つて置きながら、臺所の方へ冷麥を命じて、
「おい、葵に水をやらないと枯れちまふぜ」
と、繼ぎ足して元の座へ直つた。
「何しろ金と云ふ奴は扱ひやうで素直にどうでも働くんだから妙だよ、そしていくら酷使したつて不平一つ云ふぢやなし、コツ〳〵よく稼ぐもんだぜ……」
と、述懷めいた獨り言を云つて、

「むかし鹽原多助は、其日の賓溜め金を夜になると神棚へ上げて、今晩一夜のお宿を致します、明日はまたお早く御出掛け下さいまし、そしてお友達を連れて來て下さい、私も一緒に働きますから、あなたもどうぞ稼いで下さい、と云つては拜んだものださうだ。家へ長く泊めて置くと、怠け癖がつくから、何でも早く追ひ出しては使ふと云ふ憲法だつたんだネ、その位だから上州沼田のどん百姓で、あんな大身代を作

り上げたのさ」

轉じた話頭は岡辰式哲學の序曲である。

「尤もこの話はお祖父さんの寢物語によく聞かされた話だがネ、子供の時分だつたので、その頃はそれ程興味を持つて聞いちや居なかつたよ……それよりは青馬がどうしても動かなくつて丹藏と云ふ男が多助の身代りに殺されるところの方が面白かつたな……」

老人は懷舊的な眼を伏せて、指の先を見つめながら、

「それがだん〳〵年を取るに從つて、靑の悲劇よりか、賣溜めを拜む方がしみ〴〵と感じて來たんだネ、金と云ふ奴は腹が減つたつて其儘食べられる譯ぢやなし、寒いからと云つて其儘身體へ貼りつけて見ても、溫かくなるぢやなし、懷ろへ大切にしまつて置いたところで、腹が一ぱいになつてる譯ぢやなし、物に換へなきや何にもならない、その代りうんと拵へて物に換へるとなれば、こんな重寶なものはないさ、うまく使へば男爵にさへなれるんだから素的なもんさ、そこで金をうんと作るには、金に金を產ませる算段だ、何でも寸分の餘裕も與へずにコキ使ふんだ。人間は人間の子を產む、犬は犬の子を產む、卽ち金は金を產むと云ふ寸法だネ」

と、例の通り下唇を舐めながら、爽やかな辯舌がつゞく。

「それには第一金を遊ばせないことを考へなければならない。動物と違つて金は其儘にして置くと一圓は一圓、五圓は五圓でいつまでも凝乎して居るんだから……そこへ先づ注意しなければならない」

と、虫干の書類の方をちらり眺めたが、思ひ出したやうに今度は步厚な大福帳と云ふのを持つて來て二三度埃を叩いて前に置いた。

「これだ、これは俺の兜町時代の記錄なんだが、家を一軒持つた時のことから書いてある」

引附いたやうな紙を、バリ〳〵剝がすやうに二三枚めくつたが、またもとの通りにポンと伏せて、ポツ〳〵語り出した。

大正八年の九月頃の事である。歐洲戰爭の好況時代、買ひの一點で相當に儲けた彼は、講和會議の氣分が濃厚になるにつれて、懷ろを引締めて來た。それまでは何でも買ひ安心の時代なので、夜さへ明ければ玉を殖やしで買つて居ると云ふのだから資本はいくら有つても手許に遊んで居るやうな事はない。ところが引締めて見ると自然に金が剩つて來る。金を遊ばせないやうにすれば、

賣か買ひに出なければならない。折角の金を焦つて反對に出てしまつたら種なしになつてしまふ。いつそ之れは手許に金を置かない工夫をしなければならない。けれども彼れは銀行へ預けて置く氣にもなれなかつた。地所ではいざと云ふ時の間に合はない。そして彼は考へた。いつそ公債をみんな買つてしまはうと云ふのである。株が高利廻りで繁昌する時は公債は反對に割安になる。株へ人氣が集つて居る留守に公債を買はうと云ふのだ。そしてそれだけは全然無いものとして新しい仕事で息を拔かうと云ふのである。

彼は遊び金一文なしと云ふ身柄になつて家を一軒借りた。それは赤坂のある屋敷町で、石の門に洋館の應接間、二階が三間に下が四間、湯殿が別建で離れがある。庭も相當に廣くつて、石燈籠が二つもある。豪勢な住居だつた。

「それで家賃が百二十圓と云ふのさ」

と、老人はケロリとして一服吸ひつけた。

「そこで家中を眺めたネ、何も豪奢な生活をしたいと云ふ考へぢやなし、人間は借金がないと退歩するとカーネギーと云ふ人が云つて居るさうだから、せめて家賃にでも追はれて見ようと思つたゞけなんだから、飾りも體裁もあつたもんぢやないよ、洋服は一着主義、和服は一組限り、雨傘と洋傘が一本づつ、臺所道具は一揃ひ、何でも遊んで居るものはないやうに氣をつけて、お寺のやうにガランとした住居さ、それで居てよく注意をすると未だ遊んでるものがある。それはあの床の間だ。あの儘にして置いては見つともないし、僞の翠雲位はかけて置かねばならず、素燒の布袋樣位はないと恰好がつかないだらう。しかし翠雲や布袋樣では稼ぎの足しにはならないから、いつそ潰してしまはうかとも思つたが、家は家主のものだ、まさか壁を塗つてしまふ譯にも行かないだらう。考へた揚句に大きな風呂敷を下げてしまつた。そして其中は洋服箪笥の代用さ、かうして煎じつめて行くともう遊んで居るものはない、これでよしと思ふと、まだ大きなものが遊んで居るんだ」

灰吹をポンと叩いて、煙管をフツと吹いた老人の口元には得意の微笑が色づいて居た。

「何です……？　その大きなものと云ふのは……？」

「そりやア君、家主へ預けてある敷金さ」

家主と銀行

「なる程ネ」

「近頃は、敷金へ利息をつけて呉れる家主さんが出來たさうだが、家賃の敷金位馬鹿氣たものはないネ、無利子で期限なしと云ふんだから……」

と、岡辰老人は私の顏をぢつと見た。

「さうですな、百貨店の商品切手と、借家の敷金だけは、金に目の高い人達でも見逃して居るやうですな」

「その通り、そこで俺は考へたんだ。俺の家主は大きな酒屋でネ、手廣く商ひをして居るんだ、まア無駄だと思つて交渉に行つたんだネ」

「敷金へ利子をつけろと云ふ事ですか」

「いゝや、そんな手緩いんぢやない。先づ第一にあなたの所には銀行の當座が有りますか、と云ふんだ、先きは大きな酒屋さんだ、銀行は二つも三つも取引して居るさ」

と、彼れ一流の交渉は家主の酒屋との問答になる。

「銀行の取引はございます……」

「それでは大へん御無理なお願ひですが、敷金を少し増さして頂きたいのでございますが」

「はア、結構ですな」

「只今まで差上げてゐる敷金は慥か千圓だと思ひましたネ」

「そうです」

「それではもう千圓だけ増して二千圓にして置きませうか」

「はア……？　妙ですな、大抵の人は敷金を負けて呉れと云ふのですが……」

「その代り家賃を十圓負けて頂きたいのです」

「なる程、家賃を十圓負けると一ケ年に百二十圓、千圓に對して一割二歩の利子と云ふことになりますな、それは一寸困りますな、敷金に利子を拂ふやうなものですから……」

「御尤もです。それでは公債で敷金を差上げることにしては如何です、二千圓……？」

「公債では困りますな」

「しかし、あなたの銀行でも、公債なら根抵當に取ると思ひますが……」
「それは公債なら確實です」
「では、此二千圓の公債を其方へ御入れになつては如何です。そしてあなたの方へ私の家賃が入らなかつたら、銀行から貸越しで引出して下さい。勿論其分の利子は私の方でお拂ひ致しますが……」
「少しやゝこしいですな」
「ですけども、あなたの方も御商賣のやうでございますから、銀行を御利用なさる事が多いでせう。二千圓の擔保之れを時價千八百圓として、其八掛けとしても千四百四十圓は自由に御融通が出來ると云ふものです、もし現金だつたら千圓だけしか御融通が出來ません」
「なる程御尤もですな」
そこで彼と家主の話はうまく成立した。彼は、二千圓の敷金預り證書を持つて、今度は銀行へ出かけて行つた。銀行の貸附係りと應接室に於ける問答がまた揮つて居る。
「これを貸越し擔保に取つて頂きたいのですが……」
「これは家賃の敷金預書ぢやありませんか」
「さうです」
「擔保物件として制定されたものゝ中に斯う云ふ種類のものは扱はれて居りませんが……」
「御尤もです、しかし減多に貸越しをお願ひすると云ふやうな事はありません。その代り別に公債證書を二千圓ほど入れます」
「その公債の方なら御預り致します」
「序にこれも如何でございませう」
「それは不可ません、それは若しあなたが家賃を納めなかつたらそれだけづつ効力が無くなつて行くものですから……」
「では斯う致しませう、毎月家賃の領收書を前月の二十五日に提出することに致しませう、それまでは効力の無いものとして差支ありません、家賃を滯りなく拂つて居る以上は、完全に効力を有して居るものですから……それも長期の貸越しは願ひません、二日か三日の事です。私の振り出した小切手が交換所へ廻つて來る間だけでも結構なんです」

「困りますな」

「でも無擔保で、帳尻を御心配になるよりは宜いぢやありませんか」

「それもそうですな」

「兎に角これは之れとして預つて置いて下さい、私の方では毎月家賃の領收書を提出致します、つまり効力に疑問の無いやうにしてだけは置きます」

「では……長らくの御取引でもありますから、手前共の金庫へ保管だけして置くことに致しませう……」

「それで結構でございます」

鳥渡年十二割

「そこで君、算盤だ……」

と、岡辰老人は、五玉をサラリと拂つて、

「敷金は預けた公債の利子が二千圓で五分利卽ち百圓、なに？　税金、それは買入れた時の値開きで、立派に算盤が立つよ、それから銀行の擔保で假りに時價九百圓として二枚だから千八百圓その八掛に見て千四百四十圓、これを一割に廻して銀行へ日歩一錢八厘卽ち年六分五厘七毛の利子を拂ひ、差引三分四厘三毛、此處で四十八圓三十九錢二厘と云ふ金が殘るだらう」

「やゝこしい利益ですな」

「いや、金を極端に利用するには、かうしたやゝこしいところが肝腎なんだ」

「そこで、合計いくらの利益になりますな」

「百圓と四十八圓三十九錢と、〆めて百四十八圓三十九錢になるから、恰度一ケ月十二圓三十六錢餘り安い家賃に入つて居られることになる」

「しかし、それには千四百四十圓の金を一割に廻はさなければならないぢやありませんか」

「無論さ、その一割は一割として年一割どこの働きでどうなるもんかネ」

「へえ……？　ぢやもとに廻すんですか」

「だつて君、一割だけぢや、家賃を十二圓三十六錢割引さしただけの事ぢやないか……」

「御尤もです……では何か商賣の方にでも廻はさうと云ふのですな……」

「商賣と云ふ程の事ぢやないがネ、手數のかゝらない仕事で、多くの人に喜ばれながら完全に月一割は儲かるな、いやもつとなるかな……？」

「月一割……？　それでは年十二割ぢやありませんか……」

「さう〳〵年十二割さ、驚く程の事はないよ、資本の運轉率と云ふものは妙な數字を出して見せるからネ、三越なんか見給へな、大抵は六分見當の利益の標準として居るのださうだが、あれだけの諸入費を引いて二割の配當をしながら。積立金がドシ〳〵出來て行くぢやないか……」

「なる程ネ、不思議なものですな」

「いや、不思議でも何でもないさ、六分の利益を一年十二回運轉すると七割二分になるだらう……當りまへなんだ」

冷麥が來た。

「どうです、溫くならないうちにやつて下さい」

「それであなたは夫れをやつたんですか」

「行つたとも、今でも誰かやれば宜いと思つて居るんだ、俺がそれを廢してから不便で困る〳〵と云つて居るものがある」

「しかし、商賣となると餘程の決心がないと……？」

「なアに、商賣と云ふ程のものぢやない、片手間で出來る仕事なんだ、內職とも云へない程に簡單な仕事だよ」

「へえ……？　そいつは耳寄りですな、一つ話して頂けないでせうか」

「よし、話してやる……おい　やくみがついて居ないぞ……」

と、岡辰老人は臺所の方へ聲をかけて、割箸を二つに割いた。

金儲け競べ

貯金のコツ

「資本は幾何でも宜い仕事なんだ」

番茶を一口に呑み干した岡辰老人は、タオルで口のまはりを拭きながら向き直つた。

「大きければ何萬圓でも、小さければ何十圓でも、それ相當にやれるんだから面白いよ」

「それで誰にもやれる商賣なんですか」

「さあ、商賣と云へば商賣とも云へるが、まあ機轉一つの御奉公だな……やるのは誰にもやれるさ……！」

「それをあなたが實驗されたんですな」

「さうだ、先刻も話した通り、俺も若い時は君達のやうに、何かうまい儲けづくはないもんかと

隨分焦つたものだ」

ニヤリと笑つた目尻に親しみの深い小皺が寄る。

「その話を伺はして頂けるんですか」

「うん、話さう、しかし金儲けの話だの探偵談だのと云ふものは、結論だけぢや面白くないもんだ、尤も講釋師ぢやないから、話に味をつける必要もないが、苦心の筋道が判らないと、第一呑込めないよ……」

と、岡辰老人は吸ひさしの朝日を灰吹の中へ押込んで、咽喉へからんだ痰を輕く吹つ切つた。

「さう〳〵、此話は君一人だけに話すのは惜しいやうな氣がするな、と云つて出し惜しみをする譯ぢやないが、他に三人ばかり是非聞いて貰ひたい人があるんだ……隨分古いことだから、今はお互ひにどうなつて居るかまるで音信不通だが、一人は今でもある保險會社に勤めて居る筈の片山と云ふ男だ、一人は其片山と俺とが間借りをして居た本郷のある洗濯屋の親爺よ、これは其時分に宜い年だから、死んだかも知れないが、生きて居れば八十からだらう、それにお粂さんと云ふ十八になる其處の娘さ、丸ポチヤの美人だつたネ、母親に早く別れた故か、十八でも廿位には

見えたな、よく稼ぐ感心な娘だつた、これも其の頃の娘だから、今ぢや二三人の親になつてるだらう」

「はゝあ、妙な取合せですな」

「はツ〳〵〳〵は、まるで三題噺のやうな話だが、目の寄る所へ玉とはよく云つたもので、俺と片山、親爺と娘、これが寄ると觸ると金儲けの話だ、尤も片山と云ふ男は俺と違つて學校へ通つて居たから、兎に角學校を出てからとの事で、俺達ほどの熱心な金儲熱はなかつたが、お粂さんの方へ素的な熱だつたんだ、俺達がいろ〳〵な話をして居ると傍へ來ては合槌を打つて居るやうなものゝ、話の方はどつちでも宜い、お粂さんにお茶でも入れて貰ふのが何よりの樂しみだつたらしいな、すると人情と云ふものは妙なもんで、何でもない俺が變な氣持になる。彼奴俺達の話を材料にしてお粂さんを貪つて居るんだなと思ふと、譯もない嫉妬が湧いて來る。そしてまた此お粂さんたるや、親爺の娘だけあつて却々の仕末屋でネ、金や經濟の話になると一所懸命なんだ」

「へえ、十八や十九でネ……」

「まア凄かつたな、或る時だつたが郵便貯金の通帳と、貯蓄銀行の通帳を二冊持つて來て、俺にこんな質問をするんだ、郵便貯金と云ふものは十五日後の分は利息がつかない、貯蓄銀行の貯蓄預金と云ふものは其月の五日迄に預けたものへは其月分の利息がつく、郵便貯金をする人が十六日に積むとその一月分の利息をまるで損をする事になる。貯蓄銀行へ六日以後に貯蓄すると、之れも其翌月分からでなければ利息がつかないから、無利息で遊ばれてしまふ。これを遊ばせない工夫を考へたのですが、之れで宜いのでせうかつて云ふのだ……」

「へえ……？　細かいところへ目をつけたもんですな」

「いや、全く恐れ入つたよ、そこで其お粂さん案だ、女らしいぢやないか、郵便貯金は十五日以後の時及び十錢以下の端數には利子を附せずと云ふ規則になつて居るから十錢以下の端數は絶對につけないことゝする。そして一日に預ける金はあつても十五日迄は他で利子を産ませ、必ず十五日になつてから預けることにする。夫で合理的に二重の利子を稼ぐ。そこで貯蓄預金の方は毎月五日迄に必ず入れること、六日以後は月一ぱい無利息だから預けてもつまらないと云つて店へ日に日に這入つて來る金を其儘にして置いたのでは尙更つまらない。第一物騷だ、これをどうすれば宜いか、と云ふ質問さ」

「はゝア、徹底した金錢觀念ですな」

「そこで、俺も考へたよ、成る程商人と云ふものは日錢が入る、それを家へ置いたのでは、利息が働かない、と云つて郵便局でも間に入れたんでは駄目だ、貯蓄銀行も五日以後は無利子と云ふのだから、考へるのも無理はない。と、ひよつと浮んだのが特別當座預金さ、これは利率は安いが、預けた日から拂戻す日迄の利息が日歩で計算される、それになさい、いくら安くも無利子よりは況しでせう、と云つてやつたら、有難うございます〳〵と喜んで居たよ」

「なる程、女らしいですな、其處で、そのお粂さんを中心とした片山、岡辰の暗闘となる譯ですな……」

「あツはツ〳〵は、そう素ツ破抜いちや不可いよ。顏から火が出るわな……」

家計簿の秘密

岡辰老人は若返つたやうな氣持に元氣よく笑ひながら、

「そんな譯でお粂さんと俺とは話がよく合ふんだ。片山の奴は內心これを妬いて居たんだネ、けれども何も怪しい關係があつた譯ぢやない。お粂さんの經濟意識と俺の經濟意識とが相通じて居たと云ふだけの事さ、それだのに片山の奴は堪らなくなつて、或る日親爺に向ひ、たうとうお粂さんとの結婚問題を持出してしまつたんだ」

「はゝア、面白いですな」

「ところが此親爺なるものまた一癖のある男でネ、どうも此頃二人の間がお粂を中心として面白くないやうだ、お粂も最早や年頃だから、嫁にやつても養子を取つても宜い、それには働きのある人間でなくては不可ない、と云ふので或る晩の事、俺と片山とお粂さんと三人を招んで、笊そばを一つ〳〵取つて御馳走をした揚句、こんな話を切り出したんだ」

と、老人の話は例に依つてはずみ出した。

「皆さん、今晩は我が洗濯屋の重大問題について御協議を願ひます、我娘ではありますが、お粂も愼重に考へて欲しいのです。と云ふのはこの洗濯屋相續人の問題であります。私はよる年でありますから、然るべき人があつたら、早く後を讓りたいと考へて居りますが、偖て緣談と云ふものは長し短し、有るやうで却々無いものです。そこで私は考へました。どうせ私の後を委すなら

氣心の知れた人がよい、もし此洗濯屋が氣に入らなかつたら、全然違つた方針を取られても差支ありません、それにはあなた方のうちで、もしお粂でもよいと云ふ方がありましたら、不束ながら面倒を見てやつて欲しいのです、しかし二人一度にお粂の夫とする譯には行きません。そこで私は更に考へました。甚だ恐縮ではありますが、茲に一つの問題を提出し、それを合理的に解決したものを第一候補と定めたい、と云ふのであります」

片山と岡辰は足の裏を掻かれるやうな思ひで、兩方の膝をキツチリ合はしたまゝ謹聽して居た。洗濯屋の親爺は謹嚴な眼をパチ〳〵させながら、更に言葉を繼ぎ足した。

「お粂にも斷つて置く、兎に角我洗濯屋の消長に關する大問題だから、お前は今日から、家計一切を司り、尤も合理的な家計簿を作つて貰ひたい。そしてお二人には尤も斬新奇拔なる金儲法を考案して頂きます。勿論私も便々として居るものではありません、みなさんと同じやうに考案致します……と云ふ譯なんですよ、どうですみなさん、一つやつゝけようぢやありませんか」

洗濯屋の親爺は急に胡坐をかいてニコ〳〵しながら二人の顏を見た。二人は抱いて行つて土俵の外へドシンと置かれたやうにフーツとなつた。片山は頭を搖きながら、

「なる程……、竹取物語のかぐや姫と云ふところですな」

と云つて笑つた。

「面白いネ、金儲競爭なんて負けた所で幾らかになると云ふもんですな」

岡辰も笑つた。そして、

「しかし親爺さん、これは一定の期間を定めて置かないと困りますな」

と、もう實行案に取かゝつた。洗濯屋の親爺も同意した。そして此懸案は一ケ月を期間とし、それまで夫々答案を持つて集まることゝなつた。

一ケ月は經つた。

笊そばが一つづつ配られた。そして先づお粂さんの家計簿點檢から初まつた。

「お粂、お前の家計簿を持つて來な」

黄八丈の着物に睫毛の長い下町風のお粂さんは、何時にない今日は美しさと羞しい風情とを織交ぜた姿で、臺所帳を持つて來た。

「字が拙いからきまりが惡い……」

耽々たる二人の候補者を前にして、彼女の動作は如何にも艶つぽかつた。

「字が拙いつたつて、要領さへ得れば宜いよ、芋や大根の値段にお家流でもあるまい」

丸い眼鏡をかけ直した親爺は、お粂から臺所帳を引たくるやうに取つて開けて見た。

「おやツ何だい、こりやア……？　恐ろしく○の多い帳面だな、算用數字だな、こりやア俺には向かねえ、誰か見てやつて呉れませんか」

お粂の書いたのは横書の算用數字で、簿記風だつた。岡辰は親爺からそれを受取つて見たが、これも目を丸くした。

「なる程、これは○の多い字ですな……エヽと大根が一本五圓、佃煮が十圓、醤油が二百五十圓と……素晴しい身代ですな」

お粂さんは眞ツ赤になつた。片山は親切さうな目つきをして、お粂さんをかばふやうに、

「位取りが違つて居るんぢやありませんか、どれ僕に見せ給へ……」

と臺所帳を岡辰から引たくつて一通り目を通した。そして獨り首肯くやうに首を輕く振りながら、

「位取りの間違ひです、これは仕方がありません、お粂さんは簿記を習はれたのぢやありませんから、○が二つ宛多いんです、ねえ、そうでせうお粂さん……」

お粂ははつきりとした目で首を上げた、そして兩方の手を膝の上に組み合はして、

「いゝえ、間違ひぢやありませんの……それで宜しいのです」

と、云ひ切つた。片山の目の玉が轉轍機のやうに一つ動いた。

「これで宜いんですつて……？　いや違ひますよ」

彼はかう云はねば女に負けるやうな氣がしてならない膝を乘り出した。お粂さんの瞳は童話の星のやうな落つきで、

「それでよろしいのです」

「こんな書き方は何處で習ひました」と片山は意地になつた。お粂さんの唇は紅芙蓉のやうに徐ろに綻びた。

「それは私流なんです學校で習つたんぢやありません、○を多くつけたのも承知の上です、兎角金錢と云ふものは端數で置くと粗末にしやすいものです、大根が一本五錢だとすれば深く考へな

いで使つてしまひます、一本五圓の大根だとすれば無駄にする氣が起りません、十錢の佃煮だと何かもう一品もこしらへなければならないやうな氣が起ります、十圓の佃煮だと思へば、此上もない御馳走のやうに思はれます、そして其日々々に合計して行きます、一日々々と大へんな費用が嵩んで行くやうな氣がしますから、結局豫算を大切に致します……」

岡辰は膝を打つた。

「いゝぞ〳〵お粂さん大出來だ……」

片山は身慄ひをした。親爺は口を開いたまゝ煙管を逆さまに咬へた。

からだが資本

「ときに、今度は片山さんの番です」

と、親爺は茶を入れ替へた。

片山は坐り直して、ふむ……と一つ唸つた。そしてもじ〳〵しながら、

「僕はあれ以來、いろいろ考へても見ましたし、外國の實例なんかも調べて見ましたが、どうもこれは國情が違ふし、これと云つて思ひつきの材料がありません、そこで私は考へました……」

と、聲を落して茶を啜つた。岡辰は心の中で、扨は何にも無いのだなと思つた。そして蔑ましい目で片山の方を眺めながら、

「名案が泛びましたかな」

と追窮した。片山は塊のやうな唾をコクリと嚥んで、

「いや、名案ではありません、極めて平凡な案です、と云ふのは第一私には資本と云ふものがありません、資本なしで商賣をすると云ふことは賃銀以外にありません、そこで賃銀を取ることに決心致しました。幸ひ學校も來年卒業することになつて居りますから、學校を出さへすれば、直ぐにも使つて頂けるやうに依頼して廻りました」

「ふむ、月給取りかネ」

と、洗濯屋の親爺は興のない顏をした。

「そうです、月給取りです、それも普通の月給ではありません」

「はゝア……？　どんな月給取りです」

「ある保險會社と豫約をして參りました。今のうちから學校の合間に保險の勸誘をやる、そして成績を上げて行く、學校を出たら社員に採用して貰ふと云ふ事に決めて參りました」

「なる程、保險會社に雇はれる事を豫約して來たと云ふ譯ですな」

「そうです、世の中には學校を出さへすれば直ぐにも就職口があるやうに考へて、在學中は職業などと云ふものには無關心なものが多いのです、其學校を出れば學校で就職口を世話して呉れる、又人を求める方でも今年度は何人採用すると申込んで來ると簡單に考へて居る人もありますが、

世の中が不景氣だと、仕事が減つて人が剩ります。結局失職者が多くなる、大抵のことでは就職出來ない、其處で自棄を起す、折角長い間の學資と時間とを無駄にしてしまふと云ふやうな結果になります。それかと云つて人が剩ると云ふのでは有りません、失職者の多い一方に、有用の人は引張凧なんです、そこで私は考へたのです、學生のうちから職業の實地に馴れて居れば、同じ採用されるにも當選疑ひなしと、それには何が良いかと煎じつめて見ると、保險屋さんが一番良い、これは保險を勸誘する實地が外部で行はれるんですから、學生としての自由が束縛されない、勿論最初から給料を貰ふと云ふのではなし、出來たらよし、出來なければよし、孰れにしても最善の努力を吝まなければ、將來必ず酬いられるところがあると信じました。そこで二三日前ある保險會社へ行つて豫約をして來た譯なんです」

「なる程、眞理ですな」と、岡辰は膝を撫でた。洗濯屋の親爺は判つたやうな判らないやうな目つきをして首を引いた。

「それで會社へ勤められるとなれば月給は幾何位になるんですの……」

お糸さんは片山の方を見ながら云つた。

「さうですな、初任級は七十圓（此時代は二十五圓）と云ひましたが……」
「すると一年に八百四十圓ネ」
「そうです、それにボーナスがあります、これは會社の營業成績から打算されますから、見當はつきませんが、年二期で五ケ月位と思ひます……」
「五ケ月……！　三百五十圓と八百四十圓で千百九十圓と云ふ譯ですな」と岡辰は云つた。
「その通りです、つまり資本なしで一年千百九十圓の働きと云ふ譯です」と、片山は片手で顎を撫でながら云つた。洗濯屋の親爺は煙管の火玉をストンと吹いて、
「いや、良く判りましたよ、片山さん、そりやあ資本なしぢやありませんぜ、大資本でさあ、まあ考へて御覽なさい、一年に約千二百圓と云ふ金を儲けるには、一割二分と見て一萬圓の金が要ります、だからあなたの身體は一萬圓の資本と見積ることが出來るのです、つまり一萬圓の資本を働かして年額千二百圓の利益が上がつて來ると思へば、金滿家の方でさア、結構ですよ、まあまあ其資本に疵をつけないやうに働くことです、精勤して月給が上れば、資本金が增額したと、尙更大切に働くこと、それを不平や不滿で勤めを怠けたりなんかして、首にでもなれば、元も子をなくしてしまつた貧乏人になると考へなけりやなりません」
片山は諄々と說く親爺の話を傾聽した。そして、
「一萬圓の資本家、七十圓の月給取り、なる程、これは眞理だ」と考へた。
お粂さんも、岡辰もそれには一言もなく感心した。
「そこで今度は君の番だぜ」と、岡辰の方へ向き直つた洗濯屋の親爺はニツコリ笑つた。

金儲けの急所

「私は今度不思議なことを發見しましたよ」
話上手な岡辰は、表情を誇張する目を丸くして、
「金儲けと云ふ奴は大きなものに目標を置くことよりも、小さなものに氣を付けることが極意だと云ふことが判然わかりました。勿論目的は大なるをよしとしますがネ」
と、前提して、彼が一ケ月に渡つて體驗した仕事を話し出した。お粂さんも親爺も、片山も片唾を呑んで膝を寄せた。

「あの約束をした翌くる日の事でした。何かうまい仕事は無いものかと、切通しから上野廣小路を抜けて萬世橋の通りへ出ました。すると大時計が修繕されると云ふので足場を組み、亜鉛板で圍ひをこしらへて居る所でした、見るともなく、それを茫然見て居ると、あの奇麗な亜鉛板が惜し氣もなく釘で打つけられて行くぢやありませんか、勿體ないことをするなと思ひながら、下の方に働いて居る仕事師に、あの亜鉛板は、この用が濟んでしまつたらどうするんですと訊ねて見ました。すると之れは商賣が違ふと見えて、さアどうするか、まア古金商へでも拂下げてしまふんだらう、と云ふ返事なんです、古金商はどうするんでせう、と云つたら、どうするか判らないがあゝやつて釘で穴を穿けてしまつたものは、二度と屋根板には使へないから、矢張かうした普請場が次から次へあれば宜いの場へ賣るより外はありませんと云ふのです、して見るとかうした普請場が次から次へあれば宜いやうなものゝ無かつたらどうすると訊ねると、妙な顏をして、そこ迄は考へつかないネ、古金商のことだから何とかして捌くでせうよ、と云つたつきり、妙な事を諄々と訊く男だと思つたらしく、足場の中へ這入つてしまひました」

「隨分根氣よく訊ねたもんだネ」

親爺は笑ひながら合槌を打つた。

「それからどうしました」とお粂も笑ひながら云つた。片山は眞面目な顏で、矢張り顎の下を撫でゝ居た。

「そこで私は考へた、かうやつて次から次へ渡つて行く亜鉛板の後を蹤いて行つたら、屹度何かになるに相違ないと、柳原河岸の古金商へ飛び込んで訊ねて見ると、さう云ふ風になつてしまつた亜鉛板は玩具の製造工場へ行くんださうです、そして夫れは先づ子供の喇叭屋が常得意だと聞き込みました。それから下谷の二長町にある喇叭問屋へ行つて訊ねると、どんな古い亜鉛板でも繪具で染めてしまふから結構だとのことです、そして昔しは下駄の古いのから齒磨の小箱を作つたことさへあると云ふやうな話さへして呉れました」

「なる程、面白い話だネ」

と、片山は微笑した。

「それから其喇叭をこしらへてしまつた屑はどうしますと訊ねると、これは古金商へ拂下げてしまふと云ふのです」

「それでは逆戻りをするのネ」とお粂さんは念を押した。

「さうです、そこで私もまた古金商へ逆戻りして其の拂戻した屑金はどうするのだと訊ねると、今度は胃散の鑵を作る家へ賣るんだと云ふのです、そこで芝橋にある胃散の鑵工場へ行つて見ました。すると成る程どうにもしやうのない鍼の切屑が山のやうに積でありました。小僧さんや中僧さん達がその屑金を金敷の上へ乘せて大きいのは大きいの、小さいのは小さいのと選り分けて切つては伸ばし、切つては伸ばして居ります。そうして居るうちに屑金は矢張り一段と細かい屑金となつて別の方へ積み上げられて行くのを發見しました。私の目はそれに吸ひ付けられてしまひました。これは一體どうするんですと金網のやうになつた屑金に指さしをして訊ねますと、これは屑屋にやります、と云ふのです」

「下にや下があるもんだな」

と、親爺は首を曲げた。

「それからまた屑屋を尋ねたんですか」

とお粂さんは話の先を追つた。

「今度は大變なんです、下谷の入谷と云ふんですからな、それでも此處まで追つて來たものを殘念だからと思つたので、芝橋から入谷まで勇を鼓して歩きました、宜い加減な道程ですぜ、漸くのことで屑屋を探し當てると、有りましたよ、散々に弄ばれて滓のやうになつた屑金がアンペラを被つて錆びかけようとして居ます。そこで今度は屑屋の爺さんに夫れの處分法を訊ねたものです、するとお爺さんも之れには當惑して居ると見えて、屑屋と云ふ渡世は人間の屑以外は何でも買はなければならないと考へて、買つて來たやうなものゝ、これには手を燒いて居る、錬り直しは利かないし、河の中へ捨てれば怪我をするし、怎しようと考へて居ました、ところが悴の奴がうまい事を工夫して其事で今行つて居る所です、もう歸つて來ますから待つて居たらどうだ、と、茶などを入れて呉れました。四方山の話をして居る所へ息子さんが歸つて來ました。そして機嫌の宜い顏で挨拶をしながら、たつた今此屑金利用の途が開いたとの事です、興味のある話だし、丁度よい所だと思つたので、ことに依つたら其仕事を共同でやつても宜いと云ふ風に話しかけると、息子さんは大そう喜んで、實は花川戸の鼻緒屋へ飛び込んで、話したところが、兎に角拵らへて持つて來て見ろとの事でした、と云ふ話なんです」

「何です拵らへろと云ふのは……」

片山も大分興に乘つて來た。

「それがネ、爪掛とゴムの間へ打ちつける鋲なんです、成る程これは思ひつきだと云ふので、自分も共同でやる事を約束し、金敷とたがねを拵らへて片つぱしから其屑金を役立してやつたものです、すると最初の穴あき亞鉛より、喇叭より、胃散の鑵より、この方が遙かに利益率が多いのです。金儲けと云ふ奴はこんな所が急所ぢやないかと考へましたよ」

と、岡辰の金儲哲學は實際を前にして、事面白く話された。洗濯屋の親爺は一も二もなく首肯いて見せて、

「金儲けの急所は夫れだよ、其處で二人共一つ俺に手を貸して貰ひたいのだ」

と、居住を直して、親爺案なるものを話し出した。

狙ひ所摑み方

洗濯屋の親爺は懷ろから皺苦茶になつた古新聞を出して三人の前に擴げた。そして丁寧に皺を伸ばしながら、

「さあ、これを良く見て吳れ、いろいろな廣告が出て居るだらう」

なる程、其處にはいろ〳〵な廣告が出て居た。役者の寫眞を並べた石鹼の廣告や、竪に長い葡萄酒、眞ツ四角な味の素、横に廣い齒磨、眞ツ黑な字の活動寫眞、太線でかこんだ吳服屋の賣出し、商標だけの銀行、淸楚な圖案であつさりしたおしろい、滿天下の諸君と大きな字の講談倶樂部等が、各面毎に雜然と組込まれて居る。

「第三種郵便物と云ふのは、全面の三分の一以上は廣告を入れることが出來ない規則なんだが、日刊新聞だけは大目に見られて居るんだ、素晴しいぢやないか」

と、洗濯屋の親爺は獨り言のやうに呟いた。

「大へんなもんですな、こんな大きな廣告をして商賣になるんでせうか」

片山は今更のやうに驚いて見せた。

「なるんだよ、しかし俺の發見したのはそんな大きな廣告の方ぢやない、小さい方なんだ、社會面の記事下とか、講談の下とかにづらりと並んでるのがあるだらう」

「はゝア、色白くなる薬、わきがの療法、男女の祕密病、中風の妙薬、人を引つける座談の祕訣、速成中等講義錄、書簡辭典、金鎭り景品附銀時計賣出し、いろ〳〵ありますな、これですか……」

「それ〳〵、それだよ、其廣告の中にたつた一行……さうさな一行ほども無い、七字で宜い、その七字が金儲けになるんだ」

洗濯屋の親爺は目をショボ〳〵させて、得意さうに肩を搖つた。

「懸賞の字探し……？」

と、お粂さんは廣告を覗き込んだ。

「いや、さうぢやない……」

「かうした廣告を利用してやる新商賣ですかな……」

と、岡辰は云つた。親爺は大きくかぶりを振つて、

「そんなぢやない、その中に書いてある七字が金儲けの種なんだ」

まるで子供に謎かけをした時のやうに、兩方の膝をゆすりながらニヤ〳〵した。

「なんでせう、七字の金儲けつて……」

お粂さんは克明に廣告を讀み初めた。片山も岡辰も種々に手を拱んで首を曲げた。親爺はたうとう噴出すやうに笑ひ出した。

「はツはツはツは、敎へてあげよう、そら定價の傍に振替口座の番號が出て居るだらう、其隣を御覽、郵券代用一割增と書いてある、これだよ金儲けの種は……」

煙管の先で一々其文字を指しながら、說明し初めた。

「爲替や振替貯金で送金されゝば、其儘現金に使ふ事が出來るから、見世先で商賣をするのも同樣だが、三十錢だの十錢だのと云ふバラ〳〵な郵便切手で送つて寄越されると始末に困るんだ、中には三錢二錢と云ふ遣ひよい切手で來るのもあるが、これとてもバラ〳〵になると粗末になり勝で、結局餘計な減りが出る、其處で郵便切手で送つて來る奴は一割增と云ふ事になつて居る、これは誰が定めたと云ふ譯ではない、自然とそう云ふ慣習になつてしまつたんだネ」

「その郵便切手をどうするんです」

と岡辰は膝を乘り出した。

「それを買つて歩くんだ」

「資本が大へんですな」

と、片山は興のない顔をした。親爺は大きな目をして片山の方を見詰めながら、

「そこだよ、資本はあればあり従ひさ、薄資本ならそれでも出來る」

「それで其郵便切手をどうするの……」

お糸さんは怪訝な顔をした。

「それが金儲けの種さ……」

「勿論其切手は割引して買ふんでせうな」

と、岡辰は熱心である。

「無論……！、もとく一割増で受取つた切手だ、一割引で賣つても先方には一文の損も無い、始末に困つて居る郵便切手なんだから、喜んで賣つて呉れるよ」

「なる程」

と、岡辰は腑に落ちた顔をした、けれども夫から先の捌方をどうするか、それが一つの疑問だつた。

「相手の始末に困る切手を買入れて、これを有利に捌くとすれば、一割引から五分位を引いて賣らうと云ふのですな」

岡辰の目は親爺の目に吸ひ付けられて居る。親爺は飛んでもないと云ふやうな顏をして、

「そんな手緩いことぢや金儲けは出來ない、捌く法は立派にある、しかも割引なんて云ふケチなんぢやないよ……」

と、親爺は鼻紙を出して大袈裟に鼻をかんだ。

大滿足と大滿點

親爺の話に三人は、引つけられてしまつた。發見、獵奇、期待、と三樣の心持が輕く渦を卷いた。親爺は話し出した。

「さあ、その郵便切手を買入れたら、今度は其捌き方だ、これが何でもない平凡なことなんだが一寸面白いんだよ、そこで二人共手傳つて貰ひたいと云ふ譯さ……」

と、岡辰の方をチラリと見て、

「君達にはネ、兜町から蠣殼町の米株仲買店を歩いて貰ひたいんだ、電報をおうちになるんでしたら、代理に行つて參りませう、料金は後でよろしうございますと云つてな」

「なるほど……」

「電報料は郵便切手で支拂ふことになつて居るんだ、資本が大きくなれば、電話を一本敷いて置いて、電報代辨業も面白いぢやないか、それに急設電話の架設期になれば、廿圓づゝの架設料は郵便切手で宜いんだから、書入れ時とでも云ふかね」

岡辰はすつかり合點が行つた。

「名案だネ、やりませう、一つやらして下さい、成る程それは氣がつかなかつた。これは名案です、郵便切手で困つて居る人に御奉公して、電報料を代納してやつて、そして一割の金が完全に儲かる、即ち怪我人が一人もなくつて立派に金儲けが出來ると云ふ譯ですな」

親爺は大きく首肯いて、

「其通り、どうです、手傳つて呉れるかネ」

と、得意さうに三人を見廻した。片山もすつかり腑に落ちた、が、何となく解せないやうなものがあるやうに、物靜かな調子で、

「しかし、一割增の材料が無くなつてしまつたら、どうするのです」

と、訊ねかけた。親爺は此處ぞとばかり膝を進めて、

「それ程世間から重寶に扱はれゝば會社を起さうぢやないか、そして今度は遞信省と直接取引だ」

稍々昂然として小鼻が、二三度膨らんだ。岡辰は親爺のさうした確信を頼もしく思つた。

「なる程、しかし郵便局直接だと利廻りがずつと薄いでせうな」

と、おづ〳〵訊ねた。親爺は輕く點頭いて見せて、

「だが、依頼者が多くなれば利率なんか問題ぢやないよ、百圓で一割なら十圓だが、千圓の一分も十圓だ、金儲けをするには此處へ目標を置かなければ不可い、第一懇意な郵券賣捌所があればそれと共同でやつても宜いぢやないか、郵便切手賣捌の手數料と云ふのは、三等局で三分五厘、小賣捌所で三分に定まつて居る。三分の人と共同で一ケ月一萬圓も扱つたらどうなる、三百圓の利益になるだらう、二人で配けても百五十圓づつだ、それでも足りない程依頼者が澤山あると云ふやうだつたら、會社にする。銀行とか會社とか郵便切手を澤山扱ふところへは、特殊と云つて二分引で賣つて呉れる、これなら二分は丸儲けだ、だから銀行や會社の大きな所へは内密だが、一ケ月に何千圓と云ふ電報料を納めるところなら、二分は完全に儲かると云ふものだ、……どうだ、うまいものを探したらう」

＊　＊　＊　＊

「……と云ふので、金儲け競爭は洗濯屋の親爺が滿點さ……」

と、岡辰老人は明るく笑つて、例の黑飴を一つ頬張つた。

「すると、お糸さんはあなたのものにはならなかつたのですね」と、私は其方へも興味を持つた。

老人は右の頬へ黑飴をふくらまして、

「だつて君、親爺が滿點なんだもの、まさか親娘で結婚も出來ないぢやないか」

晝過ぎ頃の草いきれは、生溫い風を送つて、軒の釣惹をくる〳〵廻して居る。岡辰老人は、新らしく冷たい麥湯を呼んで、

「若い時の事だ、いろ〳〵な苦勞もあつたが面白いこともあつたよ、しかし金儲けと云ふものは人の目に見えない順序がある、君が其辛抱さへ出來るなら、一つ順序を追つて話してやらうぢやないか」

坐り直した岡辰老人は、膝の上で團扇をクル〳〵廻しながら、親しげな目を瞬つた。

途端に表の格子がガラリ開いた。

此の道彼の道

妙な算術

「お祖父さん只今ッ！」

孫さんらしいのが、ランドセルを背負つた學校歸りの姿で、元氣よく襖をガラリと開けたが、私が居るので急にはにかんでしまつた。岡辰老人は例に依つて、金の儲かりさうな話をボツ〳〵して居たが、急に目を細くして、

「おう、早いな……今日は土曜日だネ、お客様へ御挨拶をしなさい……孫ですよ」

と、私の方へ微笑ましい目を呉れた。孫さんはランドセルを背負つたまゝ、ペタリと御辭儀をして、

「小父さん、今日は……」

と挨拶して眞ッ赤になつた。

「はい、今日は、御勉强ですネ……」

もつと何か云はねばならぬやうな氣はするが、私はいつも斯うした場合に、子供に向くやうな調子のよい言葉を持つて居ないので、テレてしまふのである。

「今日はお地藏樣の緣日へ連れてつてやるから、お八ツを頂いたら、早く勉强してしまひな」

「今日は駄目なんです」

「どうして……？」

「宿題があるんですもの……」

「宿題……？　何の宿題……？」

「算術……むづかしいんだよ……」

孫さんは、急に丸い目をして、懷つこい岡辰老人の顏を見た。

「あツはツは……そんなに算術がむづかしいか」

「え……！　とてもむづかしいんだよ」

「うむ、算術と云ふものは嘘が吐けないんだから、一所懸命、正しい頭で勉强すれば誰にでも直ぐ出來るもんなんだ」

岡辰老人は訓戒めいたことを云つて、

「どんな宿題なんだい……？」

と、孫さんの手を取つた。孫さんはかぶりを振りながら、

「駄目、駄目、お祖父さんなんかに出來るやうな、やさしいんぢやないんだもの……」

「あツはツはツは……さうかい、まあどんなんだい」

老人は甘えられる嬉しさを目の中に見せて、こんどは頭を撫でてやつた。

「それよか、お祖父さんにこんな問題がわかる……？」

「なんだい」

「足が六本で、目が三ツある動物つての……？」

「足が六本で、目が三ツ……？　さア一寸困るな、そんな算術かい……？」

「うゝん、……まアなんでも宜いから考へて御覽なさい」

「そんな動物ッて、化物よりほかにないぢやないか」
「うゝん、化物なんか今日文明の世界にあつてたまるもんか」
座敷馴れて來た孫さんは、稍々軒昂な肩をゆすつて鼻を一つ啜つた。
「さア、化物でないとすると、お祖父さんにも一寸困るね……」
「やあい、大人の癖に判らないんだな、教へて上げませうか、その代り、僕の宿題を教へて呉れる……？」
「よし〳〵、交換條件と來たな、何だか云つて見なさい」
「それはネ、それは……目つかちが馬に乘つて居るんだよ」
「あッはッはッは、これは一杯食つちやつたな……」
「ぢやアお祖父さん御約束だ、この宿題を教へてよ、ネ」
孫さんは、ランドセルを下ろして、雜記帳を引張り出した。

三と一で四

孫さんの宿題は、鶴龜算の四則だつた。岡辰老人は胸算用でスラ〳〵と解決してやつて、私の方へ顏を向けた。
「ねえ君、鶴龜の四則なんてものは、うまく出來てるぢやないか、鶴の足が二本、龜の足が四本、それで數字の觀念をはつきり得させようと云ふ仕組だ、これは日本だけだ、世界にこんな巧妙な教授はないよ」
と感心したやうな獨言で話しかけた。
「さうですかネ、して見ると日本の算術と云ふものは、一歩進んで居る譯ですネ」
「ところが俺には未だ腑に落ちない點があるんだ」
「と云ひますと……？」
「學校の先生が教へる算術は、只原理、原則と云ふ通り一遍の型式で、實際問題とは緣が遠すぎるんだよ、先達も大笑ひな話があるんだ」
と、眼鏡を外して、眼のまはりを二三度コスリながら、
「俺の親戚に、高圓寺で小間物屋をやつてる奴が居る。そこへ女學校出身とかの嫁さんが來て

ネ、或る日店番をして居ると、リボンを三かけ買ひに來た客があるんだ、リボンは一ヤールの四分の三に切つてあつて、一ヤール十九錢と云ふ値で賣る事になつて居たんださうだ、ところが其嫁さんはリボン一かけの値段を出すのに大間誤つきさ、十九錢の四分の三と云ふ分數の割出しなんだ、あんまり手間取れるんで、お客樣がじれ出しちやつてネ、もういらないつて云ひ初めたものさ、嫁さんはワク〳〵しちやつて、尙ほ出來なくなると云ふ始末さ、そこへ小僧が歸つて來て幾ら〳〵ですと卽座に商ひをしてやつたと云ふ話がある」

「へえ……？　やはり熟練ですな」

「いや、熟練だけぢやない、學校で敎はつた型式が惡いんだ」

「それぢやア、小僧さんはどうやつたんですか」

「小僧の方はネ、リボンの尺數を三ツ合はして値段を出してやつたのさ」

「なる程ネ、しかしその位な方法は學校でも敎へて居る筈でせうが……？」

岡辰老人は、こみ上げて來るやうな笑ひを嚙み殺しながら、

「それでは、君に算術の問題を一つ出して見ようかネ」

と、例の黑飴を一つ頰張つて、

「ねえ君、三と一と寄せたら幾何になりますか」

學校の先生のやうな口調で小首を傾けた。

「四です……」

「その通り、それでは一と三を寄せたら幾何になりますか」

私はむツとなつた。揶揄ふにも程がある。尋常一年の生徒でさへも、平氣で答へられる問題ぢやないか、何と云ふ不作法な老人だらうと思ひながらも、答へない譯には行かなかつた。

「四です……」

「その通り、學校ならこれで滿點だよ、しかし君、この數字を二人で持つて居て、寄せ算をすることになつたらどうするネ」

「矢張り同じことぢやありませんか」

「いや、違ふ」

岡辰の目はピカリと光つた。

「君が銀行へ一萬圓の預金を持ち、現金で三萬圓の金を金庫の中へしまつて置くとして總計四萬圓の金持ちと假定して見ようぢやないか」

「豪い景氣のよい話ですな」

「まあ、假りにさ、そして俺が三萬圓の金を銀行に預けてあつて、一萬圓の現金を持つて居るとするんだ」

「はゝあ、同じやうに四萬圓宛の金持ちですな」

「さう〳〵、君と俺とは一錢一厘の違ひもない四萬圓の金持ちだ、これで算術の答は滿點さ、ところが、世間の信用はどうなる、家の金庫で死んで居る三萬圓の金と、銀行に稼いで居る三萬圓の金では、信用にどれだけの開きが出來て來るか、……」

「なる程……」

「これが學校の算術と、世間の算術の違ふところだ……金儲けの祕傳はこんなところから芽が吹くんだ」

岡辰式金儲哲學は、愈々實際談に入らうとする。

金持三角術

「むかし金持三角法と云ふものがあつてネ」

老人は煙草の火を煙管の頭で探しながら、ポツ〳〵話し出した。

「はア、して見ると幾何學と云ふものは、むかしから有つた譯なんですね」

「いや、幾何の三角とは違ふんだ、金持は義理かく、慾かく、人情かくと云つてネ、これを三かく法と云ふんだ、現在でも此法則を守つて居る金持は少なくない。しかしこれなんかは唾棄すべき富豪術で、俺達の取る道ぢやない」

「して見ると、あなたには、あなた丈の金持法があると云ふ譯ですな」

「ある……」

確信のある口をへの字に結んで顎を引いた。

「それはどんなですか」

「三角法……」

「では、同じことぢやありませんか」

「いや、違ふ……俺のは幾何學の三角法なんだ、君も學校に居る時分は、可なり惱まされた問題だらう、二等邊三角形は其孰れの邊も相等し、と云ふ奴だ、あれだよ」

と、輕く笑ひながら、

「AとBの直線は、どう考へても極端と極端を結びつける一線だらう、一線は飽くまで一線で、これは月給取りが一ケ月働いて、晦日に月給を貰つて歸つて來るだけのことだ」

「なる程……」

「それへCの一點を加へて見給へ」

と、煙管の先で疊の上へ筋を引きながら、

「そしてこれへ線を引張つて行くと、線が三本になる、一本の線と三本の線では、誰が考へても三本の方が二本多い理窟だ、金儲けの極意は卽ちこれなんだ、いや金儲けのことばかりではない世渡りと云ふものは、凡てこれでなければならない」

「そこで三本の線の働きは……？」

「さあ、それが却々難しいんだ、まあ簡單な例を擧げて見ると、あの新聞だね、新聞は朝晩配達されて一圓と云ふ値段だらう、どう考へたつて一圓で出來るものぢやない、第一紙代から數へても一圓は安い、朝刊八頁、夕刊四頁、新聞紙にして三枚の紙だ、一枚の白紙が四厘五毛見當として一錢三厘五毛、印刷の屑紙を二分當りに見て一錢三厘七毛七朱、まあ一錢三厘八毛だな、これが一ケ月三十日として四十一錢四厘これが原料だ、それへ編輯、工場の加工費がかゝつて、配達料がいるこれ等に要する人員の數は素晴しいものだ、その給料だけだつて大へんな金が要る、迚も引き合つた商賣ぢやない、とこ

ろが發行部數が多くなれば、加工費が安くなる、配達料も幾分安くなる、と云ふので新聞の販賣擴張と云ふものは隨分猛烈なものだ、さうして出來るだけ讀者を殖やす、さうした値段の安い奉仕を受ける讀者は大喜び、其喜びが卽ちBの一點さ、一寸出來ないことをやつて奉仕する、其歸りが廣告料と云ふ收入になつて來る。部數が殖えれば廣告料が高くなる、收入は益々多くなる、乃ち新聞社は讀者をBとしてCたる廣告主から利益を納めようと云ふ方針だ、だから讀者が少なければ廣告料が減じて來る、うまく出來て居るものさ」

「眞理ですな」

「金儲けの寸法はみんな恁うしたものさ、何でも相對するものゝ奉仕を考へれば間違はない、そしてCを目標として、自ら流れて來る利益に成功すると云ふ事を忘れてはならない」と云ひ切つて、ぬるくなつた麥湯を一口に呑み干した。

「すこしやゝこしいが、辛抱して聞いて呉れ、玆が肝腎のところなんだから……」

と、老人は目をつぶつたが、突然膝をポンと叩いて、

「あるく、面白い話がある」

不動の金縛り

夜風の爲めに煽られて居た常夜燈の瞬きが、いつか漆黑の闇に呑まれてしまつて、藥研堀不動の境內は、銀杏の葉が騷ぐだけで、ひつそり閑と更けて行く、本堂も庫裡も、大きな眞つ黑なものを抱いて居るやうな靜けさで、折々柱の破れる音が、夜明けを待つものゝやう……

「ミシリ〳〵」

廣い廊下を踏む足音が、本堂の方へ近づいて行く。

本堂の奥は一層の闇である、たゞ磨かれた眞鍮の燭臺が、ともすれば何かの拍子でキラリと光るやうな心持がするだけで、手探りでもつまづきさうな深闇である。

忍び込んだ男は、感を働かしながら賽錢箱を一廻りした。

「ガラン……」

と幽かな音を立てた、正面の金網に觸れたのであらう、男の足は爪立てたまゝで疊の緣を踏んで行く。

と、ガラ、ガランと云ふ大きな音を立てた、同時に、

「うむッ」

と、吠えるやうな唸り聲が聞えたかと思ふと、

「あッ、あッ、お助けッ、助けてッ、うむ……うむ……」

闇の中で、眞ッ黑な影が、虚空を摑んでの苦しみである。

「ど、ど……どなたか……どなたか……」

咽喉がつまつて出ない叫びを心の底から洩らしながら、手足を藻掻く光景は、何者かに締められてゞも居るかのやう、七顚八倒の苦悶である。

さうした物音は、この靜かな本堂で、四邊に響かずには居なかつた。庫裡と境の戸がガタリと開いたかと思ふと、雪洞の光が、滲んだやうにボーッと差した。

「誰ぢや、何者ぢや」

方丈の聲らしい。軈て雪洞を突出した方丈は、寢卷のまゝの姿を現はした。

「誰ぢや、何者ぢや」

雪洞の上から覗くやうにして、苦悶する男を覗き込みながら、

「どうしたと云ふのぢや」

年輩の故でもあらう、落ちついた聲で、怪しい男に訊ねかけた。男は矢張り虚空を摑んで、血を吐かんばかりの苦惱を呻きつゞけた。

「おゝ、お助け下さりませ、私が惡うございました、わゝゝわたくしの不心得から、お不動樣の御怒に觸れました、おう、お不動樣、御許し下さりませ……うむ……うむ」

「ほう……金縛りに逢つたのぢやな……」

方丈は呟くやうに云つて、

「どうしたのぢや？」

と、更に訊ねた。例の男の苦悶は未だ止まなかつた。

「その……その通りでございます、出來心とは云ひながら、こちらには金無垢の獨鈷があると云ふ話を聞き込みまして、惡いことゝは知りつゝも、盜みに參つたものでございます。こんな眞ッ暗な晩だから、お不動樣にも氣がつかれまいと、茲まで忍んで參りますと、百度札へ躓つまづい

た途端に、こゝこの通りで御座います、方丈様、お許し下さりませ、今日から屹度心を入替へて、眞人間になりまする、方丈様、御願ひでございます」

方丈は靜かに雪洞を下へ置いた。

「さうか、惡いと云ふことに氣がつかれたか、眞人間になると云ひなさるか、よろしい、わしがお不動様にお願ひして上げる程に、神妙にさつしやれや……」

方丈は何やら口のうちに唱へながら、雪洞の灯を、燭臺の蠟燭にうつした。四邊は急にパツと明るくなつた。方丈は更に腕にかけてあつた珠數を爪繰つて、清淨の響を切りながら、一心に經を上げた。

例の男の苦悶はだん〳〵に薄らいで行くらしかつた。

「有難うございます、方丈様、有難うございます」

幾度か禮を云つて、利いて來る五體の緩みを、不思議さうに眺めながら、

「助かりました、惡いことは出來ないもの、私も今日から、すつかり心を入れかへます、有難うございました」

例の男は心から禮を述べながら、元の闇の中にしを〳〵と立去つて行つた。

方丈は、灼熱なお不動様へ、もう一度珠數を揉み直した。

二十兩の仕事

カラリと曉け放れた六月の朝の陽は、柳原の大銀杏のてつぺんに働き初めた。

「どうだい兄弟、ゆふべはうまい仕事に有りついたかい」

一人の男は、銀杏の根へ腰を下ろして、一服吸ひつけた。

「駄目々々、飛んでもねえうちへ飛び込んぢまつてよ、あべこべにお說教を聞かされちやつた」

「なんだつて……」

「泥棒なんて商賣は、つまらねえからよせつてんだ、一晩十兩稼いでも、一月遊びやア、一日幾何になるつて、それで御用と來りや、臭い飯を食ふばかり、まかり間違へば笠の臺が無くなるんだ、そんな手薄な商賣より、一文二文の摑み商ひでも、照り降りなしなら、つもつて見りやア大きなもんだつてさ」

「うむ……！　尤もだ、尤もな御意見だが、こちらにや野暮過ぎる御説教だ……」
「が、それはさうと、手前何かやつて來たか……」
「うん、たいしたこたア出來ねえが、これ一つよ」
と、懐ろからピカ〳〵光るものを出して、一人の男の手に渡した。
「なんだ……？　こりやア坊主が持つて歩く獨鈷ぢやア無えか」
「さうだ」
「これが何かになるのだい」
「兄弟、それは金無垢なんだぜ、藥研堀の不動様から搔拂つて來たんだ……して見ると俺が兄貴になるのかな」
「金無垢……？　そいつあ豪勢だ、そしてどんな鹽梅に搔拂つたんだ」
「なアに譯やア無えさ、昨夜あれから目星をつけた不動様へ忍び込んで、都合に依つたらもう一軒と、息を殺して待つて居るとな、風で燈りを取られてしまひ、一寸先も見えねえ眞ッ暗闇さ、いくら泥棒だつて、暗闇で見える目玉を持つてる譯ぢやなし、手探りで佛様の前まで行つたもの

の、好い加減なものを引掴んで、目星の黄金無垢を置いて來るやうぢやアと思つて、考へたんだ」
「ふむ……」
「何しろ明りがなくちや仕事にならねえもんだから、明りを呼ぶ工夫をな」
「少し圖太えな」
「どうせ斯うなりやアと思つて、不動の金縛りを眞似たんだ」
「へえ……？　こりやア面白えな」
「すると方丈の奴め、思ふ壺にはまつて、雪洞を持つて來やがつた、〆〳〵と腹ん中では雀躍しながら、

哀訴歎願に及んだんさ」

「なる程」

「方丈様は正直だ、一所懸命に御經を上げて下さる、其隙にちよくらもちさ」

「ふむ、なる程、そいつあ宜い考へだ」

「どうだ、これで俺が兄貴になれると云ふもんだな」

ニヤリと笑つて見せた。一人の男は何か考へて居るやうだつたが、

「ところで、此黄金無垢は幾何でバラせるんだい……？」

と、掌で目方を引きながら相手の口元を見た。

「さうさな、二十兩なら、おんの字だ、この不景氣に二十兩たア……どうだい、今日から俺が兄貴だぜ……」

一人の男は、急に顔を上げたが、

「うんにや、駄目だ、どうもこりやア俺の方が兄貴になりさうだわい」

「なに……？　だつてお前一文も稼いで來ねえぢやねえか」

「これから稼ぐんだ、まア宜いや、俺のあとを跟いて來ねえ」

百兩の仕事

其日の晝過ぎ頃、二人の男は、不動様の庫裡に、膝小僧を並べて坐つて居た。方丈は物靜かな調子で番茶を入れながら、二人の來意を訊ねて居た。

「實は誠に面目ねえことを仕出かしてしまひましたんで、御詫びに上りました……」

「ほう、何かわしに粗忽でもなすつたと云ひなさるかの」

「へえ、實は昨晩のことなんでござんす、こいつはわつしの兄弟分なんでござんすが、どう戸惑をしたものか、こちら様には黄金無垢の獨鈷があるつてんで、夜中に忍び込みまして、お騒がせ申し上げました結果に、方丈様の隙を伺ひ、これこの通り、盗んで來てしまつたんでございます」

方丈は未だ氣がつかなかつたと見えて、昨夜の騒ぎを思ひ泛べながら、今更らしく驚きの目を瞬つた。

「それでは、あの時の金縛りと云ふ奴は嘘だつたのちやな」

「左様でございます、全く明り欲しさの狂言なんでございました」
「ほう、さうで御座つたか、しかし却々の智慧者ぢやのう」
寂しさうに笑ひながら、番茶を入れて二人に配つた。
「ところで、方丈様に御願ひがあるんでございますが、お聞き届け下さいませうか」
「おう〳〵お前さん達が、前非を後悔して、これを返しに來たからは、正しいことなら何なりと肯いて進ぜませう」
「有難うございます、實は二人共根ッからの泥棒ではございません、一文二文の飴菓子でも、商賣と云ふ商賣なら、どんなことでもしていんでございますが、何しろ其日に追はれるみじめな有様、何かの動機で眞ッ直な商賣に立返りていと思ひながら、貧の盗みに追はれて居るやうな譯でございます」
「ほう……ほう……」
「そこでお慈悲深い、方丈様に御縋り致しまして、此黄金無垢の獨鈷は、お不動様に御返し申し上げ、其代り、今日から五日間のお賽錢を私等に御貸し願ひていんでございます」
「今日から五日間の御賽錢……？」
「左様でございます、それを資本に二人は、飴菓子なりと、鮨饅頭なりと、人様と肩を並べられる商賣を初めていんで御座んす」
「なる程、よいところへお氣がつかれた、しかし、御賽錢と云つても、見られる通り、深川の不動様とは違つて、參詣人があると云ふのではなし、五十文か三十文のお賽錢ぢや、それを資本にしたところで、また困んなさるのが落ちだよ、それよりか、お二人共それ程神妙な心掛けにならつしやられたのなら、少なからうが、わしが幾何かの資本を貸して進ぜよう」
方丈は眞心こめた男の願意にほだされたのか、立上つて、用箪笥の引出しに手をかけた。例の男は、兩方の手で遮るやうな恰好をしながら、
「と、とんでもねえ話でござんす、方丈様がその様にお柔しく云つて下さると、わつち等は穴がありやア入りてい位でございます。たとへ五文が八文でも、お賽錢が資本だとなりやア、變な氣持が出る度に、これはお不動様の御金だと思ひまして、ちつと引締める心になります、お金の高を申す譯ぢやございません、どうぞお聞届け下さいますやう……」

方丈も成程と思つた。お不動様がついてゐらつしやると思へば、悪い了簡は出ないと云ふ神妙な改心振りへ、感じ入つたものゝやうに、

「いや、そのお心懸ならそれもよいであらう、しかし足りないものを當にして、商賣が立行かんやうだつたら、いつでもわしに相談するがよい」

金儲けのコツ

「これは享保時代の出來事だが、一寸面白いだらう」

と、岡辰老人は話しつゞけて、一息入れた。

「はア、して見ると、二人はすつかり改心したんですネ」

話に吊込まれて、其先を聞き出さうとすると、岡辰老人は得意さうな小鼻をヒコツかして、

「これが金儲けの極意なんだ」

と、きつぱり云ひ切つた。

「と云ひますと……？」

「そのお賽錢が素晴しかつたんだネ、何じろ泥棒を金縛りにしたと云ふ評判が、八方に擴まつたので、參詣人は引きも切らずさ、五日の賽錢が百兩あまりとは驚くぢやないか」

「なる程……」

「それを資本にして二人は正業につき、立派な商人になつたと云ふことだ」

「いゝ話ですな」

「いや、只簡單に良い話として聞流してしまふ話ぢやないんだ、どうです、一人の男が盗んだだけなら二十兩でおしまひだ、それを正直にして、參詣人を見越したところが、つまり金儲けのコツなんだ、卽ち黄金無垢の獨鈷を盗んで來たのは生命がけの一直線さ、それを返してお賽錢を貰ふと云ふのがCの一點を加へた安全な三角術なんだ、總て金儲けの調子は、これから初まるんだ」

「なる程ね、自分、努力、奉仕、この三點に線を引く理窟ですネ」

岡辰老人は大きく點頭いて見せたが、また何か思ひ出したものゝやうに、咽喉佛を二ツ三ツコツクリさせて、

「ところが君、その三角で思ひ出したが、これは形の上の三角で大儲けをした話があるよ」

と、眼尻に得意の皺を見せた。

「形の三角と云ひますと」

「それはね、妙なことで三角になつてしまつてね……」

思ひ出し笑ひのやうにクツ〳〵しながら、

「俺の知つてる神田のあるカフエーの話なんだ、以前は立派な角店で大きな水菓子屋をやつて居たんだが、區劃整理で半分以上も削られてしまつたんだ」

「はゝあ、それで三角な家が出來てしまつたと云ふのですね」

「さう〳〵、往來は素晴しくなつたが、其角へちよこなんと三角に取のこされてしまつたんだから大騒ぎさ」

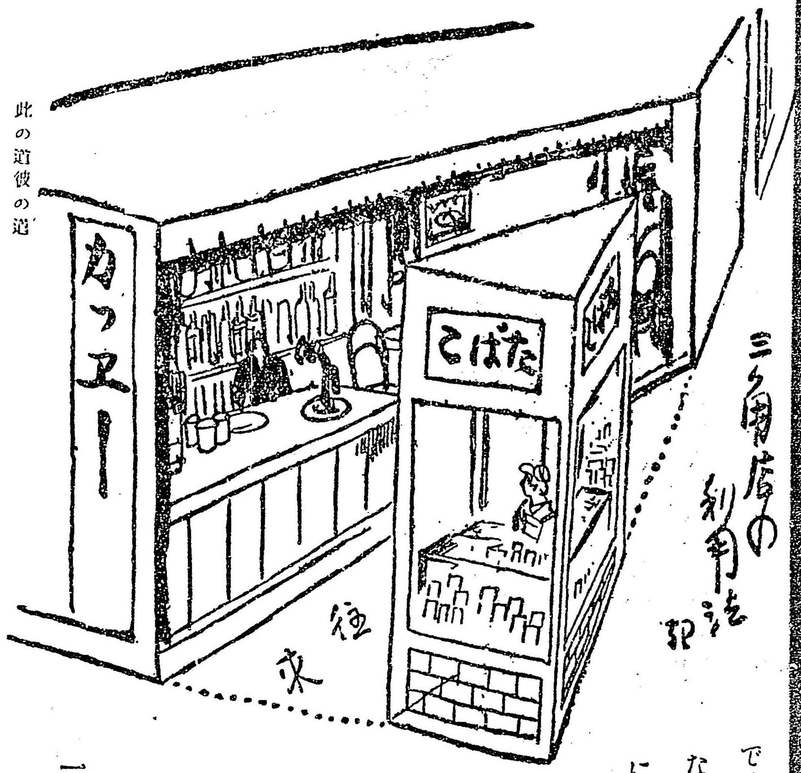
「なる程」

「それもさ、なみ一通りのことでなつたんぢやない、親讓りの商賣だから、どうしても水菓子屋をやらなければならない、それにしてはこんな小つぽけな三角店ではどうしやうもない、どうしたら宜からうと、家中相談の結果、俺に何か智慧を貸して呉れと云ふのさ、さう云はれたところで、俺にもどうすると云ふ名案も出ない、兎に角現場を見てからのことにしようと云ふんで、まあ行つて見た譯さ」

「はゝあ……」

「行つて見ると成る程驚いたね、三角店と云つてもたつた六坪しきやないんだ、六坪で三角なんて店は何商賣にしたつて困るよ、流石の俺もこれには弱つたね」

老人は煙管を抛り出して、朝日を一本拔いたが卷きの堅い胴中を、指



の腹で揉みほごしながら、

「往來は十六間道路と云ふ馬鹿氣て廣いもんさ、一方は電車通りで、三軒目のところが停留場だ、客足を止めて見ようつたつて、これぢやあどうにも仕やうがない、先方の奴も餘程困つたと見えて、俺の顏ばかりシゲ〳〵見て居るんだ。すると一寸したことで俺の頭に浮んだものがある。それから俺は話してやつた。どうだ、此店を繁昌させる考へがあるんだが、俺に一切を委せるかつて……」

「ふむ、ふむ、名案ですな」

「なあに名案でもないが、他にこれと云ふ考へもないのだからね」

得意さを謙遜するやうに、鼻の下を思ふさま長くした老人は、

「どうだ、この店を二坪ばかり削つて往來へ寄附して見ないかつて云つてやつたんだ、すると先方の奴は驚いたね、此上二坪も取られたら、第一店のものゝ居る場所がないと云ふ騒ぎだ、ウフツフツフ……どうも世間の人達は誰も同じやうな考へを持て居ると見えて、目先だけしか働かないんだね」

「へえ……？　四坪で商賣ですか」

「うん、立派な商賣が出來る、そこで兎も角も俺に委して見ると云ふことになつたもんだから、大工を呼んで、其三角店の眞ン中を斜に通り抜けの道にしてしまつた、そうすると一坪ばかりの小さな三角が往來へ飛び出したやうになつて、三坪ばかりの勘定臺見たいなものが、手前の方に殘つた譯さ」

「不思議な店構ですな」

「ちよつと見ると店のやうには見えない、そこで商賣だ、三角に飛び出した正面は裝飾窓にして煙草を並べる、勘定臺の方へは自由に使へる卓上電話を一つ据ゑつけて、隅の方へは珈琲器が一つ、正面の棚には洋酒をならべて、ソーセーヂ、鹽豆、チーズだけしか置かない簡單な酒場だ」

「なる程、して見ると四坪で二軒分の商賣ですな」

「さう〳〵、人間つてものは横着なもんで、どんな場合でも近道をしたいと云ふ氣が働いて居るんだね、其曲り角を正確に曲るよりは、其處を通り抜ける方が便利のやうに感じるんだ、僅か三足か四足の違ひなんだが、大抵の人は其私設道路を通ることになつてしまつた、通り蒐りに電話

が使へる、煙草がある、便所が使へる、呑みたくもない珈琲も呑まなきやならないと云ふ氣になるぢやないか」

「なる程」

「これもさ、一坪の道路を奉仕にしたお蔭だ、煙草と珈琲のBは通り抜けのCに助けられて大繁昌、どうです、この三角術は……？」

岡辰老人は感心を誘ひかけるやうな目つきをして輕く笑ひながら例の黑飴を一つ頬張つた。

貨殖虎の巻

商賣は地の利

京橋の上をテク〳〵歩いて行く後姿がよく似て居るので聲をかけて見ると、矢張り岡辰老人だつた。

「……どちらへ……？　お珍らしいですな」

「いやあ、今日は君とのお約束だ、伺はうと思つて出かけて來たが、少し時間があるやうだから久し振りで銀座をブラついて見ようと思つてね……」

「さうでしたか、恰度よい所でした、私も今上野まで友人を送つて行つた歸りなんです、御一緒にお伴いたしませう！」

「もう、御用は濟んだのかね、それは宜い鹽梅だつた」

橋の上に立止つた岡辰老人は、銀座と南傳馬町とを見比べるやうにして、

「どうだ君、素晴しい發展だね、俺は一年に一度位しか來て見ないが、其度ごとに日本の進んで行く米突が見えるやうだ」

「でも、ちよい〳〵いらつしやるんぢやないですか」

「來るには來るがね、銀座通りは一年に一度と決めて居るんだ、さうでないと何處がどう變つたか、どう進歩したかと云ふことが目につかんもんだから、平常は裏通りばかり歩いて居る」

「なるほど、これも一つの見方ですな」

「ところが近頃の銀座と云ふものは急速の進歩だね、それだのにこの京橋と云ふ橋は却々頑固だ、あの銀座の賑やかさを制限するやうに冷やかなもんだ、しかも南傳馬町と云ふ四通八達の乘換場を持つて居るにも拘らず陰氣な店構へで、人を呼ばうともしない京橋以北の人達にも罪は無いでもないがね」

「しかし、銀座と云ふところは、新橋と京橋に壓搾されて居るために惠まれて居るのではないでせうか」

「いまの所はな……しかしもう明るさがはみ出しても宜いころぢやないかな」

「それはどうしたら宜いのでせう」

「照明だね、明るい灯で呼ぶより外に方法は無いよ、何しろ第一相互館と云ふやうなビルデングがもつと華やかにならなくては……」

「左側も暗いですな」

「うん、……だが商店街と云ふものは、西日の當る方が陽氣なもんだ、これは何の方則によるのか知れないが、大通り、何々町通りなんて云ふところを數へて見給へ、朝日の當る店通りよりも概して西日の當る方が陽氣なもんだ」

「なるほど、銀座、神樂坂、人形町、……さう云へばみんなさうですな」

「そこで商店なんかも大いに考へなければならないね、朝日を受ける店と云ふものは、どんなに陽氣にして見ても、日の暮れが早いからね、結局明るさの壽命が短いんだ、人間と云ふものはゾロ〳〵歩く時は金魚と同じやうなもので、明るい所を選つて歩くからね」

「しかし近頃は電氣の力で相當明るくは出來て居ますが……」

「駄目々々、まだ幼稚だ、これからどう變化するか判らないが、今迄のところでは、もつと考へる必要があるね、そこへ行くと支那の范蠡と云ふ人は偉かつたね」

「范蠡と云ふのは越王勾踐に仕へた武將ではありませんか」

「さう〳〵越王に仕へて二十年、會稽に恥を雪いだ名將だ、その范蠡が野に降つて朱公と改め、陶と云ふ所で商賣を初めた、陶は四通八達の場所で、まあ小さく譬へれば銀座四丁目、大きく譬へれば東京、地方なら群馬の高崎、福島の郡山と云ふやうな所だな、地の利が商賣に適して居る、見給へな群馬の高崎あたりは、むかし全盛を極めた安中のお株を取つてしまつて居るぢやないか」

「なるほどな」

「さう云ふ所へ着眼した范蠡は名を陶朱公と改めて、大金持になつた」

「矢張り商賣は地の利ですな」

「それが重大な關係を持つ、……ブラ〳〵出かけようか」

老人は先に立つて銀座一丁目の方へ歩き出した。

新案店の設計

「だが君、商賣と云ふものは面白いね、今は無くなつたが、カフエーライオンの隣りに三尺間口のネクタイ屋が有つたぢやないか」

「さう〳〵、肩をすぼめて坐つて居るやうな店でしたな」

「あれで一日の賣上げが七八十圓、多い時になると百四五十圓づつもあつたんだと云ふのだから驚くぢやないか、百圓平均としても月三千圓、一割の利益と見て三百圓、一ケ年三千六百圓と云ふものを、三尺の場所から生み出せることを考へると、大きな店では隨分無駄をしてやしまいかと思はれるね」

「さうですな……何しろあれは細長いもので、丸い輪へ引掛けたまゝ、ブラ下げて置けば、お客樣の方でクル〳〵廻はしながら選り取つて行くのですから、店員も一人で濟むし、經濟な店でしたな」

「それの大仕掛なので、アメリカにはオート・マートと云ふものがあるさうだが、銀座だつて、

罐詰屋なんかさうしたら面白いだらうと思ふね、俺はいつも食料品屋へ行くと面喰ふんだ、と云つて食べ物の中をウロ〳〵探し廻るのは、何となく食ひしんぼうのやうな氣がして、結局欲しいものが探し當らないうちに出て來ちまふことが屢々あるよ」

「實感ですな」

「そこで、あのネクタイ屋のやうに、大きな輪を作つて、罐詰や食料品を並べ其臺をモーターでゆる〳〵廻はして居るんだね、客が來たら小さなバスケットを渡す、客は自分の前へ廻つて來たものゝ中で、欲しいものを拾つてはバスケットへ入れる、拾ひ終へたら、出口で計算して貰つて錢を拂つて行く、さうすると第一店員の數があんなには要らない。減つた品物を繼ぎ足す役が一人、計算係と荷造り役で二人、見張りの監督が一人、四人居れば手が廻はる。客の方だつて、首を痛くしながら四隅の棚を探して歩くのも大變なら、店員に跟いて歩かれるのも、押し賣りされるやうな氣がして不愉快だ」

「いまにさうなるかも知れませんな」

「それともう一ついつも感じられるのは百貨店の飾窓だね、あれはもう少し動きがないと無駄だ、第一畫間の陳列を、夜まで使ふことが不可い、畫間の色彩を夜の照明に應用しようとするには無理が出來る、無理と云ふものは決して徹底するものぢやない。それはなる程、自分の店の廣告だらうから、畫間は商品見本を陳列するのもよからうさ、けれども夜は客を入れないのだから、どんなに欲しがらしたところで、それを見て翌日飛んで來るやうなお客が何人あるだらう、先づ無いと云つても宜い位だな、それなら夜は何か他のもので人を惹きつける工夫が必要ぢやないかしら」

「と、云ひますと？」

「つまり社會奉仕だね、自分の店のものは第二として機械の科學的分解を見せるとか衞生教育の動的幻燈とか、其時季々々に應じて面白い工夫が出來ようと思ふ」

「時事寫眞なんかありますね」

「それは宜いことだ、しかしそれでも自分の店を鼻にかけた廣告臭味を持たせるから氣に入らんね、そればかりでは、まだ無駄なことがある、あれを見給へ！」

と、岡辰老人は、廣い入口を指した。

時間の利用法

「あの入口には午後六時から明日の九時までは鎧のやうな戸を下ろしたまゝ、冷やかな沈默を守つて居る、外國では、この入口を利用して、營業時間外は飾窓にしてしまふさうだが、あれを工夫したら、相當立派な計畫が行はれるだらうと思ふね、これは百貨店ばかりでなく、あの敷物屋なんかも考へたら良ささうだね、いくら立派な絨氈を並べて置いたところが、よる夜半敷物を買ひに來る人は少なからう、そんなら寧そ午後六時頃から先は飾窓にしてしまつて、何處かの照明廣告にでも貸すと云ふことにしたら、相當の金が取れるだらうが！」

「なるほどさうですな、あの上野のブルトーゼの廣告なんか、下では立派な理髮店をやつて居る位ですから、應用一つで幾つにも働くと云ふものです」

「銀座の通りでも中にはよく利用して居るのもある、小鳥と水菓子と草花と食堂とを狹い店でやつて居るのもある位だから一概には云へないが、大體に於て悠長だね」

「チューキングガムなんかは廣告だけの店らしいですな」

「さう〳〵あゝ徹底してしまへば、あれも宜いが、あんなに地價の高いところだから、もつと時間的に活用することがあるだらうと思ふな」

「さうです、ですから上へ〳〵伸びる傾向はあるやうですね」

「それは打算的で、勿論の話だが、時間と云ふ奴は打算を超越する有効さを持つんだからね、第一俺達が東京へ朝早く出て來て一番困るのは何かと云ふと時間だ、君なんか未だ目の覺めない時だから感じたことはあるまいが、朝の七時頃、勇氣凛然として何か仕事をしたいなと思つて見給へ、銀行だつて會社だつて、役所だつて、デパートだつて、甚だしいのになると理髮店までが九時にならなければ初めない、この二時間を持て餘すよ」

「そこでサンマータイムなるものが問題になつて居るんぢやありませんか」

「理想だけでね、朝寢坊の多い日本には無理かも知れないよ」

「朝遲いと云へば、あのカフエーなんかも十時や十一時頃までは何とも仕やうがありませんな」

「うん、さうだ、夜は二時頃まで素的な賑やかさだが、朝は困るな」

「銀座にはそのカフエーが多いですな」

「あれは昔から盛り場にはつきものなので、多ければ多いだけ其土地は繁昌するのさ」
「しかし昔はカフェーなんて云ふものは無かつたでせうが……それに近頃の女給のやうなものも新職業婦人とか何とか云ひますから」
「カフェーとしては無いが、むかしは水茶屋と云ふものがあつた、女給と云ふものはないが、女は矢張り居たよ、例の笠森おせんなんて云ふのは、評判だつたね、今のカフェーに笠森おせんのやうなのは居ないぢやないか、一枚看板の錦繪にまでなつて、役者衆と一緒に繪双紙屋で持てたもんだ」
「なるほどね、して見ると何時の時代にもあゝしたものは必要なんですね」
「それはさうだ、ところであのカフェーと云ふ奴が不愉快だね、みんな活動の世界へ入らうとするのに、靜まり返つてまだ夜中だと云ふ風だ、だから朝の銀座は齒の抜けたやうな感じがする」
「なんかうまい利用法はないでせうか」
「ある、あれは間口一ばいのポスターを作つて、廣告に使ふんだね、朝から十時までの廣告を……間口一ばいのポスターなんか屹度受けるよ」
「面白いですな、オツと危ない、圓タクに乘りませうか」
二人は竹川町で圓タクへ乘つた。

一人前の食料

家ではもう晝飯の仕度が出來て居た。
「どうぞお平らに……」
客間へ通した老人に寛がして茶を入れた。
「合り合せで失禮でございますがどうぞ……」
膳を運んで來た妻は、老人に會釋した。
「家内です……」
妻を紹介してやつた。
「これは〳〵、毎度どうも……御厄介になります　……」
「いゝえ、いつも手前共こそ御伺ひしては御面倒願ひまして……お蔭さまで家中のものもいろい

うなお話を伺ふことが出來るので喜んで居ります」

「いやどうも、私の話は御婦人には向きませんのでな……？」

「どういたしまして、宅の主人なんかはお宅へ御伺ひして種々うかゞつて參りますと、お前達は資格がないぞ、この世智辛い世の中だ、少しは氣をつけて岡辰式にやつて呉れ……なんかと申すんでございますよ」

「あツはツはツは、岡辰式は恐れ入りましたな」

「その岡辰式も先達なんかは大笑ひなんですの……」

「はあて、どんなことですか」

「お前は臺所一切を承つて居るんだから、先づ食べ物の研究をしなければならない、そして出來るだけ節約して貯金をしろ、先達も總理大臣がラヂオで放送したことを聞いたか、私一人でどんなに心配したつて、國民が一致して其事に當つて呉れなければ、日本の景氣はよくならないつて……だから俺一人が稼いでも、お前達がお構ひなしに費つて居たんでは此家だつて景氣がよくならない、第一人間は一日に幾ら食べれば健康に差支なく生きて居られるか割り出して見ろと申すんです」

「はゝあ、名案ですな、人間が一日に幾らのものを食べれば生きて行かれると云ふ事を知るのは人間いや一家の主婦としての義務です」

「あら、あなたまでが、主人に御賛成では困りますね」

「だつて、さうぢやありませんか、これが食べものだから宜いやうなものゝ、汽車賃なら先に拂はなければならない……」

「おほゝゝゝ、岡辰一流ですわね、あら御免遊ばせ……」

「そこで割出しが出來ましたか」

「仕方がありませんからやつて見ましたの、先づ朝飯に味噌汁と漬物で一錢五厘、お味噌七匁見當ですからこれが七厘、汁の實がわかめか大根としてもお漬物と合はして八厘見當、晝は鮭か秋刀魚の切身半分で三錢、お漬物と大根おろしで三厘位、締めて三錢三厘、夕飯は牛肉十匁十錢、これに葱か大根、馬鈴薯、蒟蒻のうち二品位として一錢、あとはお野菜を一錢、漬物を五厘、締めて十二錢五厘、お八つが、お薩摩かおせんべい程度のもので四錢と見ます。これに白米二合五勺

麥一合で十一錢五厘、お砂糖や醤油で五錢と見積りますと三十七錢八厘と云ふことになります」

「はゝあ、して見ると健康を維持する人間の食物は一日三十七錢八厘と云ふことになりますな」

「左様でございます、それで約二千五百カロリー强になりますから、充分と思ひます」

「いやこれは驚きましたな、しかし豪いです、さう云ふ風に食物の單位を定めて置けば贅澤の標準が取れますからな」

「ですけども隨分苦心いたしますわ、この表が出來てから、主人はそれで豫算を定めてしまひ、これ以上は分に過ぎると申しまして、きち〳〵なんですもの」

「しかし今も御主人とお話して來たんですが、拔け目のない銀座通りにだつて、考へると、あんな穴があるんですから、考へて見ると家庭生活なんて云ふものは穴だらけですよ」

老人は何の氣なしにさう云つたが、妻の顏色を見て云ひ過ぎたなと思つたらしい。テレたやうな眼つきを私の方に向けて苦笑した。

作力時代

妻は不機嫌だつた。私も少し變だつた。岡辰老人は食べ終へた箸を膳の上へ置いて、番茶を請求しながら、

「しかし君、金儲けの根本と云ふものは、何と云つても節約、勤儉だからね、大金持になつた人達を見ると、みんな食ふものも食はずに貯めた金から出發して居る、それを考へると人間が健康を維持する食物を取りさへすれば、あとは殘らず貯蓄して宜い筈だ、貯金々々と騷いだところで出來心の貯金なんかだつたら、却つて害になる。つまり貯金がたまらないうちに依賴心ばかり出て來て、結局おぢやんだ、……だから金儲けをするなら先づ貯金、貯金するなら先づ節約、節約するなら考へる、と云ふ順序だね」

と、獨り言のやうな、釋明のやうなことを云つて妻と私の顏を見比べた。

「今から二千年も前の話だが、支那の白圭と云ふ人はうまいことを云つたね、金儲け三ケ條と云ふんだ」

老人の話は愈々金儲け術に這入つて來た。妻も女中へ膳を下げてやつて坐り直した。

「今の人達に云はしたら、十ケ條も百ケ條もあるだらうけれど、結局此三ケ條が基礎だね、つま

り「財なきときは作力し、少しくあれば智を闘はし、既に饒かなれば時を爭ふ」と云ふのだ、一文なしなら働け、少し出來たら頭を働かせろ、澤山な金が出來たら

時機をねらつて大きな仕事をしろ、と云ふのだから一點非を打つところはないよ」

私は謹聽した。全くその通りである。手段や術數は末の問題である。茲に根底を置いて、働けば必ず大きな仕事が出來る。支那の人はうまいことを云つて居ると思つた。

「そこでだね……」

岡辰老人は妻の方を瞥乎見て、

「金儲けの順序として、その作力時代の研究をして見ようぢやないか、恰度奥さんも茲に居られるから、財なき時の心得と云ふ奴を……いやこれは失禮かも知れんが、金儲け研究としての順序だからどうです、御贊成なら初めませうか」

と、一服つけた。妻は老人の話を聞くのが初めてゞある。多少の興味が湧いて來たと見えて膝を乘り出した。

「結構でございますわ、私共としてもお金儲けの資格はないかも知れませんが、節約とか、貯金とか云ふ方には關係が深いのですから……」

「いや、御尤もです、しかし金儲けと云ふのは誰でもやらなければならないことです、けれども

色の黑い人は初めから諦めてしまつて、お白粉をつけようともしないと同じやうに、金の無い人、つまり其日々々に追はれるやうな人は、金儲けをしようなぞと云ふ考へが出て來ないものです、却つて色の白い方が、もつと白く見せようと思つて、お白粉をベタ〳〵塗り立てるやうに、少し金を持つて居る人が、小手先の金儲けに手を出しては失敗するのです、ですから、私は一文なしから金儲けを考へる人は幸福だ、第一失敗する心配がなくつて儲かる樂しみだけが殘つて居る、そして世の中が明るくなると云ふのだから、大いに奬勵しなければなるまいと思ふのです」

妻はうなづいた。私もうなづいた。岡辰一流の作力時代は何を語らうとするか、興味の中心が老人の唇邊に脈動して居る。

もう一度考へる

「つまり無から有を生ずると云ふのが金儲けの出發點なんだから、節約も其一部分ではあるが、其上を越す方法でなければならない、そこで俺は何かうまい標語はないかと考へて居るんだが、「作力奬勵」も變だし、萬有還金も山師のやうでをかしいし、まあ强ひて云へば、「もう一度考へる」とでも云ふかな」

「もう一度考へる……結構ですな」

「何でももう一度考へるといふ氣持があれば自然に廢物を利用することにもなり、節約の實を擧げることも出來る。そればかりでなく、更にもう一歩進んで金儲の道へ突進むことも出來るのだ、ものは考へやうだよ、むかし二宮金次郎と云ふ人はうまいことを云つたね、江戸と云ふところは水まで金を出して呑まなければならない、何所を掘つても出て來る水を買つて呑むとは實に馬鹿氣たことぢやないか、それだから江戸は暮しにくい、と愚痴を云つた人があつた。すると金次郎は卽座に、では賣る方になつたら宜いだらうと云つたさうだ、これなんかは二宮金次郎でなくては云へないことだ、金次郎と云ふ人は何でももう一度考へた人だ、茄子の香物を頰張つても、只は食はない、おや、これは秋茄子の味がするぞ、して見ると今年は冷氣が早いんだな、これは米を賣らしてはならないと、村中觸れ廻つた。中には茄子の味が變つたつて米に關係があるもんかなどと云つて肯かなかつた人もあつたが、果せる哉、其年は有名な天保の饑饉だつた。

「はゝあ、なるほど偉い人でしたな」

「だから總て考へると云ふことは、一つの生産なんだ、どんなつまらないものでも考へて行くと隨分面白い話になる、例へば往來の電信柱が、腐つて倒れたら何になるだらうと考へて見る、それは衞生箸として綺麗な袋へ入れた割箸になるとしたら、なる程とうなづけるだらう、ところが其屑が子持箸の楊枝に使はれて居るところまで考へて來ると興味ある問題になつて來る」

「はゝあ　電柱が箸になるなぞは、好い對照ですな、しかし箸と云へば、あの一度使つた割箸はどうなるんでせう」

「そこだ君、面白いのは、……あれは駄菓子屋へ行つて金花糖の嵩口になつて居る」

「これは面白い運命ですな」

「かう考へて來ると、我々は常に無駄ばかりして居るやうだが、實際石炭から取るコールターから六千種類もの藥品や染料が出來て居るところを見ると考へざるを得ないよ」

と、岡辰老人は腕を組んで何か考へ初めた。

「全くでございますね、私達のお臺所なんかも、隨分無駄なことをして居ると思ひます。先達も米國から歸つた人の話を承りますと、洗ひ流しの滓から石鹼を作ることを發明した人があるさうでございますね」

岡辰老人は大きくうなづいた。

「さうですかな、つまり廢物利用と云ふ方ですね、しかしこれも一つの考へ方です、廢物を活用して、再び役立てることも生産です、けれども從來廢物利用として宣傳されて居るものは、利用するが爲めに金がかゝつたり、暇がいつたりしてほんとうの利用法に欲まるものは少いやうですな」

「さうのやうでございますね、大人のものを子供のものに直す位なら差支ありませんが、中にはこんなものが恁麼ものになると云ふので隨分お金のかゝるものもございます」

「ですから、さう云ふものは一つの道樂として置かうぢやありませんか、それでも結構な道樂です、そのうちに何かうまいものが發見されまいものでもない、つまり無から有を生ずる理法に叶つたものが考へ出されたら、それこそ大手柄です、しかしさう云ふものは新聞や雜誌の家庭欄の方へお任せするとして、その根本を研究するのが何より手ヅ取り早い考へ方です」

「……と申しますと……？」

「つまり金です、金を中心として考へれば、自然に廢物利用も生れて來る、節約も出來る、緊縮も行へると云ふことになるのです、何と云つても金が根本です、そこで先づ金に就いてもう一度考へるんですな」

と、岡辰老人は茶を一ぱい呑んで息を吐いた。

知らぬ間の金

「金に就いて考へると云ひますと」

私は膝を進めた。妻は茶を入れ替へに立つた。老人は嚴肅な顏をした。

「金を理解することだ、むかし伊豫の水野澤齋と云ふ人が金に就いて面白いことを云つて居る、金は人の主と書いて（これは行書の金と云ふ字だらうと思ふ）體に續く實だけれども殺伐なもので、金ゆゑ盜賊に害せられ、利欲の爲めに天壽を夭める事刀劍の人を損ふより甚だしい、また銀は金偏に艮と書く、艮は鬼門と云ひ、鬼の出る方角である、柔和な人も銀の爲めには鬼になる、錢は金偏に戈を二つ書いてある、だから戈を以て二人金を爭ふ意味である。と云ふんだ」

「なるほど理窟ですな」

「そこで金銀錢は天地人の三つに象り國家を治むること鼎の足の如し、金は陽にして日に象り、銀は陰にして月に象り、錢は陰陽の間にして星に象る、故に金銀錢を粗末にする者は、日月星の三光に捨てられ、立身出世は出來ない……とな」

「恐ろしく有難いもんですな」

「これが卽ち考へる種さ、凡て物事と云ふものは、重大に假定すれば、必ず眞理の發見が出來ると云ふもので、福澤桃介さんが云つて居たぢやないか、どんな女でも此方の愛が徹底すれば靡いて來る、金だつて其通りだ、愛すれば何處へも行きはしない、と、全くこれは眞理だよ」

「全くですな」

「そこで先づ我々現實の問題としては、金を愛すると云ふことだ、そして金を出す時も、受取る時ももう一度考へるんだね、つまり愛する女の起居振舞に注目するやうに、心變りはしないかな見捨てるやうなことはないかなと常に考へることだ……」

私は首を曲げた、云はれることは一々腑に落ちることばかりだが、一つ判らないことがある。老人は雄辯に任して、脫線するのではないかと思つた。

「ちよつとお待ち下さい」

「何です……？」

「今のお話で金を出す時に、もう一度考へると云ふことは、つまり物を買ふなら其品物と値段と必要の程度とを考へると云ふのでせうから、まあ心懸け一つで出來ないことはありますまいが、受取る時に考へると云ふのは少し變なやうですな」

「いや、變でも何でもない、出す時だつて君のやうな簡單なものぢやないさ、物を値切つたり、安いものを探して歩くだけ位で、もう一度考へるの部類には入らんさ」

岡辰老人は坐り直した。

「つまり金を出す時の考へ方は、この金が働いて來るか、討死してしまふかと云ふことを考へるんだ、そして更に其金を出す時機が適當か、どうかと云ふことだ、金を出すなら必要に迫るまで出しては不可ない、俺の若い時の話だが、ある會社の會計をして居たことがある、すると其會社は原料の仕入れに毎月十日が仕拂日で約束手形を振り出して置く、十日になれば當座預金が約束手形を落とすやうになつて居る、其間は集金を當座預金へ入れて溜めて置く、そして決濟して行くと云ふ習慣だつた。そこで俺は考へたんだね、月に一回の仕拂で利子の安い當座預金へ金を置くのは不得策だ、これは當座預金より利率の高い特別當座の方へ預けて置き、期日になつたらそれを當座口へ振替へてやればよろしい、さうすれば、當座預金と特別當座の利幅だけが生れて來

る、僅かな金でも年につもれば大きなものだ、一年經つて計算して見たら、一ケ月十二萬圓程度の出入りだつたが、四百二十五圓許りの金が生れたことがあつたよ」

「なるほど、大きなものですな、當座預金と特別當座とはそんなにも違ふもんですか」

「それは違ふ、甲種の銀行で當座は日歩三厘（百圓に付）特別當座なら日歩八厘（百圓に付）と云ふのだから五厘も違ふんだ、乙種なら當座が四厘特別が一錢だ、馬鹿に出來んぢやないか、尤もこの他に通知預金と云ふ便利で高率なものがあるがね、これは金をうんと積んで置いてやるのでなければ、毎日の集金で豫定をつけて行くには一寸困難だ」

「さうですかな、いやこれは私共も早速會社へ行つてやらせませう、そこで受取る時の方の考へ方はどうするんです」

「さあ、それが問題だよ」

と、朝日を一本吸ひつけた。

禮金の當然化

「よくむかしから、先の百より今五十と云ふ譬がある、全く人間と云ふものは金の顏さへ見ると直ぐに欲しがるもんだ、だから一寸したことで儲かるものを儲け損なつてしまふことが多い、この受取り方の考へは先達も一寸話したと思つたが三角術應用だね、あれを心得て居さへすれば間違ひはない」

「奉仕ですな」

「さう〳〵、これに就て面白い例がある」

岡辰老人は何か思ひ出したやうに、吸ひかけの朝日を火鉢の中へ突込んで、

「去年の事だと思つたが、ある出版屋さんで圓本の計畫をしたんだ、〇〇全集と云ふ奴だね」

「はゝあ、圓本ももう行詰りですな」

「いや、さう許りも云へないよ、これは出版屋さんが行詰らして居るんだから、いつかまた破天荒なものが出るかも知れない、それはまあそれとして置いて、其計畫に携つた人が居るんだ」

「ブローカーですか」

「いや、ブローカーと云ふのではないが、出版屋と著者との間を斡旋してやつたんだね、すると、

其計畫が馬鹿に調子が宜いんだ、出版屋からも著者からも、若干かの禮を包んで其人にお禮をしようとしたんだね」

「なるほど……」

「ところが其男は其禮を絶對に受けないんだ」

「はゝあ、珍らしい人ですな」

「兩方ともに困つたんだね、と云つて只と云ふ譯には行かないし、何か記念品でも作つて贈らうと云ふことになり、其人に相談したところが、これも辭退してしまつた」

「寡慾だね」

「ところがさうでないんだ、其人の曰くさ、私は此出版を大成させる爲めに、後援會を起すと云ふんだ、出版屋さんと著者は驚いたね、禮も受取らずに此上働いて手傳ふと云ふのだから、何か目的が無くてはなるまいと思つて居る間に、其人はたうとう事務所を設けて〇〇全集後援會と云ふものを初めたんだ」

「變つて居ますな」

「出版屋の連中は、成功した上で何とかしようと云ふことになり、其人の云ふがまゝにいろ〳〵便宜に甘んじて居たものさ、其内にその人は著者連のところを歩いて、あなた方の知人名簿を貸して呉れと云つて、年賀狀の古いのや、電話室にかゝつて居る出入り商人の住所まで寫して來て後援會の趣意書を送りつけたものさ」

「はあ　？」

「それから直接勸誘に歩く、たうとう一人で千部からの注文を取つてしまつた。そして其カードを出版屋さんの所へ持つて行つて、誠に不成績だけれども、これだけのものを拵らへました、夫れ〴〵お手配願ひますと云ふのさ、出版屋さんも直接讀者が千人も出來たんだから大喜びさ」

「さうでせう、しかし豪いですな、それが爲めに著者の方だつて印税が餘計に入るんですから喜ばれたでせうが」

「双方大喜びさ、其人はまるで大恩人のやうに敬服されたね」

「ところで其人は何の目的でそんなことをしたのでせう」

「それが「もう一度考へる」なんだ、つまり出版屋さんから小賣店へ卸すのは八掛見當なんだ、

だから其人の分も八掛にして二割の報酬を出すことは苦しいことでも何でも無い、千部の二割と云ふと二百圓、それが全二十卷と云ふのだから四千圓の金は當然其人が受けべき報酬なんだ、出版屋さんとしてもそれを支拂ふことは當然なんだ、いや當然どころではない、喜んで支拂ふべきなんだ」

「なる程、みんなが喜んで當然の收入を得たと云ふ譯ですな」

「さう〳〵卽ち受けべき時を考へて、僅かな禮金を當然化したところに「もう一度考へる」が働いたんだね」

「い〵話ですな」

「だから此意味で一つ作力しようぢやないか、作力の貯金化、これがまた面白いぜ」

腕の投資術

生活費六十億

隅辰老人と私と妻の話は、いつか此頃の不景氣の話へ入つて行つた。政府が緊縮運動を初めてから、平常そんなことには一向無頓着だつた妻までが、何につけて緊縮々々を口癖に云ふやうになつた。

「政府があの運動を初めてから、郵便貯金が大へんに殖えたんですつてね、何でも二十億を突破したつて話ですわ。無い〳〵と云つても、矢張り有るところにはあるものですわね」

妻は羨ましさうな顏をしてこんなことを云つた。

「豪いもんですな、郵便貯金と云ふのは初つて三十三年目の明治四十一年にやつと一億圓だつたのが、それから十年目の大正七年に五億圓、大正十二年に十億圓、そして十五億圓の聲を聞いた

のは一昨年の秋だと思ひます、それが二年間に五億も殖えたのですから……」

と、岡辰老人は相槌を打つた。

「それでも外國に六十億も借金があると云ふのでは追つつきませんわね」

「その六十億が不思議ですね、奥さん方の小さな墓口から、一年に出て行く金も六十億なんですから……」

岡辰老人はニヤ〳〵笑ひながら、妻の横顔を見戍つた。

「わたし達の使ふ金が六十億ですつて……？」

「さうです。日本人の食糧品は米が大約六千五百萬石、これを一石三十五圓として二十二億七千五百萬圓、その他に味噌、醤油、酒、菓子、鑵詰などの食料品產額約十億圓、麥、豆、大根、青物、果物などの農產額が約十二億圓、合計年額四十五億圓と云ふものが、日本人の胃袋へつめ込まれてしまふ譯です」

「まあ、恐ろしいもんですわね」

「まだ〳〵、それどころでは無い、絹、木綿、毛織物、メリヤスなどの織物產額が約廿六億圓、尤もこの内には輸出品も大分含まれて居ますが、それは化粧品とか煙草とかで差引き勘定にしても大約六十億と云ふ金は、奥さん達の指の先から拂ひ出されてしまふんです」

「あらまあ、どうしませう、恐くなつちまひますわね」

妻は今更のやうに驚いた。岡辰老人は布教師のやうな態度で、膝の上へ手を重ねたまゝ、

「ですから、日本の奥さん達が、此六十億の一割を節約することにすれば、外國の借金六十億は十年で無くなつてしまふのです。いや出來ないことはありませんよ、一體日本の婦人達は引込思案でいけません。獨逸あたりでは、婦人の團體が先立ちになつて、要らない電燈を點けてある家はどし〳〵消して歩く、臺所を覗いて歩いては、もしソースを多く使ひ過ぎた皿があらうものなら、一々注意してやると云ふやうなことまでやつて居るさうです。それを日本の婦人達にやる勇氣があるなら萬歳です。しかしこれは少し無理かも知れませんな、先達もある百貨店の方が話して居ましたが、同じ香水でも、容器を別にして値段を高くして置くと、其方が却つて賣れ足が良いと云ふやうなことを云つて居る位ですから……」

と、皮肉さうな眼をした。妻は自分の事でも云はれて居るやうな氣がしてならないらしく、モ

ジ／＼しながら苦笑した。

「と云つて安物買ひばかりが女の能ではない、一家の主婦たるものは、少なくも毎日の新聞に現はれる日用品相場位は目を通して置く必要がありますな。また自分で魚屋まで出かけて行く事は無くつても、魚屋の前を通る時には、附木に書いた正札値段位はチツと横眼で睨んで來る程度の注意が必要です」

私は好いことを云つて聞かして呉れると思つて居た。妻は大きな息を鼻から出して、横を向いた。岡辰老人は云ひ過ぎたなと思つたらしく、

「あツはツはツは、これはあなたに云つて居るんぢやありませんよ。日本の婦人達に云つて居るんです……」

と辯明がましいことを云つた。

「いゝえ、私達も注意しなければならないことです、しかしいくらづつでも貯金が出來る程度の餘裕があると、勵みもついて來るのですが……」

妻は當つけがましい顏をして今度は私の方を冷やかに見た。

「貯金……？　それがいけないんです」

と、岡辰老人は首を輕く振つた。

婦人の投資

「よく婦人の方は貯金をしたがりますが、貯金はするのでなく作るものなんです。貯金を無理にしようとすれば、何處かに足りないところが出て來ます。天引だのつもりだのと云ふやり方は、商人が何かゞ、三年貯金へ半分積んで全額の融通を受けようとするのにやることです、家庭の經濟ではそうした貯金は駄目です」

岡辰一流の說明が初まつた。妻は膝を乘り出した。

「では、一般の家庭で貯金を作るとしたらどんな方法を取つたら宜いのでせう」

「左樣……！　先づ儲けることですな」

「と云ひますと、主人の責任でございますわね……」

と、妻はまた私の顏を見た。

「いや、家庭を經營なさる方がやるんです」

妻は目を丸くした。

「わたし達がお金儲けをやるんですか」

「さうです。金と云ふものは二つの効用を持つて居ます。一つは賃貸價格と云つて利子の働きです、一つは利潤と云つて其金自身が働いて子を産むことです。あなた方が貯金々々と云はれるのは郵便局なり、銀行なりへ預けて僅かな利子を生ますと云ふ方法なんです。ですからそれはホンの少しの働きで雀の涙ほどのものにしかなりません。つまり雀の涙を欲しがつて居るやうなものです」

どうしても皮肉にならずには居ない岡辰老人の調子は、かなり無遠慮になつて來た。

「それよりはうんと儲けようぢやありませんか、と云つて私はあなた方に相場をしろの、株を買へのと云ふのでは無い、手近なところに金儲けはゴロ〳〵轉がつて居ます、いま假りに……何で説明しませうかな……」

と、岡辰老人は四邊をキョロ〳〵見廻して居たが、コツクリと唾を嚥み込んで、

「さう〳〵、あなたがたが、常に使つて居る石鹸ですな、あれを一つの例に引いて見ませう、石鹸は身體を清潔にする使命を持つて居るのですから、衞生上缺くべからざるものです、その石鹸の使ひ方に一寸頭を働かして見ようではありませんか、お風呂の下の石炭は灰になると、灰捨箱へ入れて塵埃屋に渡されます。けれども石鹸の泡はどうでせう、どんな家庭でも石鹸の泡箱と云ふやうなものはありふすまい。そこです、頭を洗つた泡を小さな盥へ取つて足袋を洗ふ。ハンケチを洗つた石鹸の泡で褌を洗ふ……」

妻は手の甲を口へ當てゝ笑つた。

「まあ、隨分細いことですわね」

「いや〳〵笑ひごとではありません、恁うした心掛が何にでもあれば、貯金は獨りでに生れて來るものです、第一今のでも洗濯石鹸一つが儲かつたことになるのでせう」

岡辰老人は熱心である。無より有を生ずる作力時代を高唱する第一ケ條とも云ふべき論旨である。

「金儲けの原則としては、現金でなければ儲けでないと云ふ了簡が大禁物です。けれども一般の

人達は百圓の心持より、十圓の現金の方を喜ぶものです。ですから貯金々々と云つて郵便局の通帳を大騒ぎするのも無理はありません。僅か四分二厘位の利子で滿足して居るやうなことでは、六十億の借金を苦にしたところで何にもなりません」

皮肉は可なり深刻になつて行く。

「私は女だから金儲けをする資格がないと諦めて居るのが第一氣に入りませんな、投資をなさい、投資を……」

煙に捲かれたやうになつて居る妻の顏へ煽りつけるやうに岡辰の眼は輝いた。

「投資と云ふと……」と、私は、妻を救つてやるやうな氣持で横から口を入れた。

「投資つたつて土地や家屋ぢやない。一年のうちで使用する生活材料へ投資するんだ、例へばこの木炭だね、これは夏より冬の方が値が高いにきまつて居る。それは需要と供給の關係からで不思議なものではない。大抵一割か二割の値上りがある。それを夏のうちに冬使ふだけのものを買込んで置けば、冬になると一割安いものを買つたことになるではないか、さうすると四分二厘の利息で郵便局へ保管して置くよりも五分八厘だけ高い利息が生れると云ふものだ。それを今度は貯金の方へ廻はすとすれば、卽ち空なところから五分二厘のものを作り出したと云ふことになる。どうだ、貯金の作り方は面白いだらう」

老人は私の方へ向き直つて一服吸ひつけた。妻はホツとしたらしい。

「わたし……一寸お臺所へ……」

私にだけ聞えるやうな聲で、老人に會釋しながら立つて行つた。

金と事業と

「いや、どうも有難うございました。大分啓發されたやうです」

私は入れ替へた茶を薦めながら云つた。

「あツはツはツは、あまり突込み過ぎた話で氣に障はりはしないかな……」

と、老人は膝を崩しながら云つた。

「いや、そんなことはありません、しかし今のお話を承つても、努力と云ふ奴は身體だけでは駄目ですね、矢張り頭の働きが九分九厘ですな」

「さう〳〵、斯う世の中が複雑になつて來ては、筋肉だけの勞働で、先へ出ると云ふとこまでは行かないよ」

「むつかしい世の中になつたものですな」

「しかし、さうばかりでも無いさ、頭が上手に働きさへすれば、却つて樂な世の中だ、先達も或る人が來ての話だが、甘い商賣をやつて居る人がある」

「へえ……？　商店ですか」

「なあに、下谷の方に居る男だが、一文なしの長屋住居さ」

「はゝあ……露店ですな」

「いや、そんなぢやない。身體一つの商賣で、却々よくやつて居ると云ふ話だ」

「これは耳寄りな話ですな」

「なあに、耳寄りでも何でも無い、今朝の新聞にも出て居るだらう」

「そんな大きい商賣ですか……」

「うむ、大きいと云へば大きいが、一寸した事さ、新聞を出して見給へ……！」

岡辰老人は朝刊を擴げて一枚二枚と繰つて居たが、案内廣告のところを出して、

「こゝだよ、恐ろしく細かい字だね、今日は眼鏡を忘れて來たので、よく判らんが、この中にある筈だ」

「はあ……？　どんなことです、郊外土地坪一圓ですか……」

「そんなんぢやない……」

「事業家の參謀、説明書進呈ですか」

「いや〳〵、それでも無い、三行の方だよ、小さく書いてあるから一寸見難いんだ、まあ宜いや、簡單な話だから説明して上げよう」

老人は茶を呑み干して、

「案内廣告と云ふものは時代の世相をよく現はして居るものだね、俺は別に女中募集の必要もなければ、恩給貸金の必要もないから、案内廣告なんか讀まなくても差支ない身分だが、いろ〳〵な世の移り變りを見るのはあそこが一番宜い、そこで毎日愛讀して居るが、東京人の尤も不便とする結婚媒介とか、派出婦とか云ふものは慥かに案内廣告が生んだ一つの事業なんだ、それが立派にやつて居るのだから、仕事がないの、勤め口がないのと云つて居る方が可笑しいぢやないか」

と、物々しい前置をした。

「なるほど、さう云はれて見るとさうですな」

「そこで君、何でもないことのやうだが、此世の中に金が有り餘つて困つて居る人と、事業があつて金の無い人とがあることは事實だね」

「それはさうでせうな」

「そこで考へついたのが彼れの商賣なんだ。即ち同じやうな廣告を一日に二つ出す。それは一方に「好事業あり出資者を求む、委細面談、場所御指定次第參上」と云ふのと「好事業に投資す、内容説明面談したし、場所指定參上」と云ふのだ」

「なるほど……」

「すると投資したいものと金の欲しい事業家とが此男の手許へ來る。其間に事業を判斷して投資家と事業家とを結びつけると云ふだけの事だ、中には如何はしいものもあるだらうけれども、誠實に働いてやれば、これでも立派な商賣になる、どうだ！　頭の働きと云ふものは無限だね」

「なるほど立派な商賣ですな、かう考へて來ると失業などと云ふものは無い筈ですね」

「その通り、第一失業と云ふ言葉のあるのが不思議な位だ」

「それだのに全國には二百萬人からの失業者があるさうですね」

「だから憤慨に堪へんよ」

と岡辰老人はテカ〳〵さした額を左右に振つた。

失業者なし

「二百萬人の失業者が履歴書を一枚づつ書くと、二百萬枚だね、一枚五厘の紙でも一萬圓の金が

懷ろで揉め苦茶になつて居る。そつちへ行つても駄目、此方の口も滿員と、一人平均五枚づつ履歴書を無駄にするとしたら五萬圓の金がフイになつてしまふ。勿體ない話だ」

と、老人は獨言のやうに呟いて、

「尤も履歴書をひねくつて居るやうなうちはほんとうの失業者ぢやないがね、愈〳〵となつた失業者は、履歴書を送る郵税どころか、借金に行くにも電車賃さへ無くなつてしまふ。よし、足を棒のやうにして歩いた所で、不義理重なる數々の手前、出掛けた先では留守を食ふ位が關の山だ、「せめてもう一度だけ」と切り出すことも出來ないやうになつてしまはなければ一ばしの失業者にはなれないな」

「そこで思想が惡化するのですな」

「さう〳〵、意志の弱い人は自棄にもならう、了簡違ひも出よう、けれどもそれは他人の爲めに生きて居てやるやうな了簡だからのことで、自分の爲めに生きようと云ふのなら、何でもないことだ」

「いや、却々さうでもありませんよ、政府でも失業救濟策には頭を絞つて居る位ですから……」

「それは宜いさ、政府としては當然の事だ、今から何千年も前のむかしでも、埃及のピラミットなどと云ふものは、失業者の爲めに作られたものださうだもの……」

「はゝあ、さうですかね」

「第一失業者の信念が氣に食はない。古來我國の進歩は失業者の爲めになされて居る、關ケ原の戰役が終つて浪人者が澤山出來た、これ等は德川三百年の基礎を築く功勞者となつて居るではないか。また明治の維新でも、大業に參加したものはみんな當時の失職者だ、經濟國難の今日、難局を打開するものは失職者の責任である位の決心がなくてはならない」

岡辰老人は昂奮した。

「けれども食はずに大業は出來ますまい」

「そこだよ、人間と人間の世界ぢやないか、人間の持つて居る弱さを知つて居る以上は、何でもないことだ」

「……と云ひますと……？」

「伯父さんも鐚一文も貸さない、友達にも愛想を盡かされたと云ふ時に、金だ、金だと騒いだと

ころで初まらない。恁麼場合はむしろ一歩退いて、いつまで無い職を探して居たつて仕方がないから、伯父さんとこの商品でも少し賣つて歩いて見たいと思ひます……と持ちかけるんだ。妙なもので、日本人は一體に商品は金で買ひ、金で賣るものだのに、品物になつてしまふと金よりも一段と格の落ちるものと見る癖がある。そこで「金を拜借」は拒われても、この商品を拜借の方は、まだ利き目がある。況して其商品を賣つて手傳ふと云ふのだから、伯父さんの方だつて喜んで貸して呉れるに決つて居る」

「なるほど……」

「それを持つて歩いて現金で賣る、そして歩合を貰ふとなれば當然の報酬に代るぢやないか、これは例としては大き過ぎるかも知れないが米國のシカゴに本部を構へて居るシーアス・ローバックと云ふ人は一ケ年に四億からの商賣をして居る。その原因は何かと云ふと、今から六七十年も前の話だが、アメリカの片田舎で驛夫をして居たシーアスだつたんだ。或日の事、自分が配達した小荷物を荷受主が拒絶したので、それを持つて歸る途中、破れた包の中から懐中時計が一つ首を出した。それが箆棒に安いので、これを賣つて見たら面白からうと云ふので、同じ驛員に話をすると直ぐ賣れた、其處で自分の懇意な人のところへ手紙を十通ばかり書いて注文を取つて見ると八人だけ申込んで來た。占めたと思つたシーアスは、其時計の發賣元である某時計店に、此種の時計を全部買占めたいと云つてやり、一方手紙を各方面へ飛ばして見ると之れが大當り、片田舎の驛員が忽ちにして大通信販賣業になつてしまつた。それを考へるとどんな機會でどんな好運を引き當てないでもない。こんな行詰つた世の中は、失業者へ自由な天地を與へて居るやうなものだ」

「なるほど、此處に道ありですな……」

「さう〳〵、日本にも之れとよく似た面白い話がある」

と、岡辰老人は懐ろから手拭を出して鼻の下を拭つた。

素晴しい札束

「これは按摩の話だがね、餘り宜い話だから、手帳へ控へて置いたんだ」

と、例の手帳を出して、頁を繰つて居たが、

「さう〳〵、名前は一寸憚かるが、熱海でも一流の旅館の話だ」
「はゝあ、旅館の按摩ですか」
「いやそうちやない。其旅館がね、あの震災で大打撃を受けた時の話さ、何しろあの騒ぎなもんだから、どうすることも出來ない。再興覺束なしと云ふことになつてしまつたんだ」
「なるほどな……」
「そこで主人公は考へたんだね、これは一つ株式組織にして建築に取かゝらう、幸ひ東京には立派な華客が澤山あるんだから、事情を話して歩いたら、十株づつ持つて貰つても百人で千株は纒まる、千株で五萬圓の金が出來るとすれば、まあ此町でも押しも押されもせぬ建築が出來る。宿屋などと云ふものは建築と寢道具が財産なんだから、それさへ揃へば必ず成功すると、まあ目論んだ譯さ……」
「考へさうなことですな」
「するとこれが大當違ひさ、宿へ來た時は大きなことを云つて居る大盡樣でも、行つて見ると案外な借家住居だつたり、どんな立派なお邸かと思ふと二階借りの未亡人だつたり、中には名の通つた實業家なんかもあつたんだが、どんなに頼んで見ても、一向相談に乘つて呉れさうもない。流石の主人公も呆れてしまつた、いや呆れるどころか草臥れてしまつたんだね」
「同情しますな」
「すつかり悲觀してしまつて、もう此儘引返さうと思つて東京驛まで來ると、毎年夏中だけ來て居る華客さんにパツタリ會つたんだ、今頃何しに來たんだと云ふ話から、それはいつも六疊の間へ閉ぢ籠つて居る粗末なお爺さんなので、計畫なんか話したつて無駄だと思つたが、兎に角待合はす時間もあることとて、一伍一什を話したもんさ」
「なるほど……？」
「すると其お爺さんは、何を思つたか、兎に角俺の家へ來て、一と晩ゆつくり話さうぢやないか、と云ふことになり、別に計畫が纒まらなければ急ぐこともないと云ふので其儘連れ立つて……向島かと思つたな……其お爺さんの家へ行つて見たんだ」
「何です其お爺さんと云ふのは……？」
「何處かの御隱居さんなんだな、家は餘り大きくは無いが、小ぢんまりとして、數奇を凝らした

構へなんだ。そこでまあ、お茶を御馳走になつて四方山話をして居ると、そのお爺さんが、膝を改めて、さて〇〇屋さん、お前さんも定めしお困りのことだらう、それに就ては最少限度どの位の金がお入用なんです、と聞いたものだ」

「喜んだでせうな」

「元々自分の目算の中へ入れて置いた人ではないから、こんな同情のある言葉を聞かうとも思つて居なかつたらしいから、まるで山の中で清水を見つけたやうなものさ」

「さうでせう、假令それが口先だけにしたところで、そう云ふ場合は嬉しいものですな」

「そこで大した金を云つたところで相談にはなるまいと思つたが、バラックにしたつて旅館の建築が二千や三千の金で出來よう筈はなし、まあ、これ位は要るだらう位に話して見たんだね」

「ふむ、ふむ」

「するとそのお爺さんは奥の座敷から素晴しい紙幣束を持つて來て、〇〇屋主人の前へ無雜作に抛り出したもんさ」

「へえ……？　驚いたでせうな」

「驚くのなんのつて、ポーツとしてしまつたさうだ。誰が困るのも同じことだ。これで何とかするが宜いと、お爺さんは別に大きな顔もしない。地獄で佛とはこの事だね。急に元氣づいた〇〇屋の主人公は、二年の後には屹度元利取揃へて御返濟致しますと云つて、早速證文を書かうとすると、そのお爺さんは、慌てゝ其手を押さへて、これ何をなさる、二年の後なんて氣の長いことでどうする、證文も何も要つたものぢやない、恰度俺も悴へ世を讓つて暇な身體だ、一二年の間は輾場を手傳つてやらう、兎に角家が無くつちや喧嘩にもならない、其方が大至急だと云ふので、其處を追出すやうにして歸してやつた」

「へえ……？　豪い度胸ですな」

「思はぬ救ひ主が出て來たので〇〇屋の主人は、取あへずバラック式の建築を拵らへ、開業する運びになつた。約束通り其お爺さんは二年間帳場へ坐つて一切の切り盛りをしてやつた。震災後の中間景氣で大當り、二年と經たないうちに其元金を戻して立派な本建築に取かゝつた。そこで其お爺さんは、其處を引拂つて東京へ歸り、今でも相變らず其〇〇屋のお客さまで毎年夏になると轉地して居る」

「はあ……？　面白いお爺さんですな」

「そのお爺さんが三圓の資本から數十萬圓の身代を作り上げた人だと云ふのだから驚くぢやないか」

街頭の黄金

「へえ……按摩はこちらでございますか」

障子を撫でるやうにして廊下へ立つた按摩は、引手へ手をかけたまゝ中の氣配を窺つた。

「こゝだ、這入つて來てお呉れ」

中から聲がかゝると按摩は慇懃に障子を開けて入つて來た。座敷の中にはもう蒲團が敷かれてあつて、待ち詫びたやうなお爺さんの顏が薄暗い電燈の下に浮んで居た。

按摩は早速治療衣を着てお爺さんの後ろへ廻つた。寢卷の襟をつまみ上げて置いて、兩方の肩を平手で叩くと、胸の方へ二つ三つ撫で下ろして、首筋から揉み初めた。

「どうだい此頃の景氣は……？」

お爺さんは按摩へ話しかけた。按摩は可なり雄辯だつた。

「駄目ですね、汽車が出來たんで東京から二時間半、日曜や祭日は二時間と云ふ急行まで出來て居る程便利になつたやうなものゝ、それが却つて此熱海には面白くありませんや、第一日歸りの客が殖えてしまつて、

逗留の方なんて云ふものは、どこの宿屋だつて數へる程しかありません、それでもまあ土曜から日曜へかけては一寸景氣がつきますよ、何にしてもこんなに東京と近くなつて了つては骨敗ですな、これで丹那隧道でも出來上つて御覽なさい、三島まで十分か十五分で行かれるんですから、この土地なんかは、まあ間の宿ですね」

肩引から背筋へ揉み下ろす指の先が、話の切れ目〳〵に痛い程力が入る。お爺さんは默つて聞いて居る。

「それに緊縮々々が祟りますね、まだ不景氣になるんだつて云ふんだからたまりませんや……」

按摩は獨り言のやうなことを云つて、右の肩へ肱をかけ初めた。

「不景氣は當りまへだね、しかしさうなつたら二人前も三人前も稼ぐことだ」

とお爺さんは相槌を打つた。

「それにしても物價がかう高くつちや」

按摩は呪はしいやうなことを云つた。

「それはお互ひだよ、第一お前さんからして揉賃を下げて行つたらどうだ、お互にさう云ふ氣持を出して、お米も家賃も魚屋も八百屋も一齊に値下げをして行けば、取る方の値が下つたところで五分なんだからな、そうすれば暮しよくなる。そして人一倍に働くことだ」

「働きたくも相手が無くつちや……」

手を揉んでしまつた按摩は、お爺さんを横にして腰の方へ掴まつた。お爺さんは鼻の先で笑ひたいやうな顏をして、

「お前さんは笛を吹いて流して歩くのかい」

と訊ねた。按摩は侮辱されたやうな顏をしたが、負惜みらしい笑ひと一緒に、

「わたしや、流して歩いたことはありません」

と云つた。

「此處の家には六七十の室がある筈だ、それを一々廻つて歩けば、流す程のことは無いかも知れないな」とお爺さんは枕を直しながら按摩の方へ横目をつかつた。按摩は憤慨したやうな顏をした。

「糶つて歩くやうな按摩に欲なのはありませんよ、私なんか身體の養生旁々來て居るんですから

實のところどうでも宜いんです」

お爺さんの足を膝の上に上げた按摩は、大腿部から脛の方への筋揉を初めた。

「ふむ……？　宜い身分だな、俺なんか僅か三兩の錢から、今では日本橋で押しも押されもしない呉服問屋まで漕ぎつけたんだが、そんな氣持で居た日は一日も無かつたよ。今だに此年をして悴に店の方は讓つて居るが、そんな了簡は出ないね、俺が若し按摩さんなら、笛を吹いて流しても歩く、室毎に注文も取つて歩く、何も稅金が出ると云ふのではなし、碌な按摩の居ないところを流して歩けば尙ほ光つて來る。室毎に歩けば三度に一度は揉んで見ようかなと云ふ氣が起る。遊んで居る暇なんかある筈はない、働く相手は往來にも室の中にもゴロ〳〵轉つて居る、勿體ないはなしだ」

と、お爺さんは獨り言のやうに云つた。按摩は濡れ雜巾を踏んだやうな氣持で首をすくめた。お爺さんは向き直つて左の足を預けた。

「へえ……？　三圓の資本から大身代……？」

按摩は感心と疑問とを一緒にして首を曲げた。

「なあに、譯はないさ、心掛け一つだよ」

と、お爺さんは身の上話を初めようとする。

手づる金蔓

「鄕里を出る時は棒縞の單衣ものに三兩の錢さ……」

と、お爺さんは流石無量な感慨に打たれるやうな眼をした。

何をしても食へる東京だ、一ト拍子うまく行けば、どんな出世でも出來る東京だ、稼ぐなら東京に限る、働くなら大都會だと、うら若い彼れの胸に描かれた憧憬の都は嘆きの町であつた。奉公口はあつた所で保證人も何もない彼は、唸る腕を抱いて流轉した。三圓ばかりの金が何時まで有らう筈はない、十日餘りでもう一飯の糧にさへ苦しまなければならなかつた。

ふと彼の頭に浮んだのは、日本橋の呉服問屋に飯炊奉公をして居る友達Yのことである。彼は疲れ切つた足を引摺りながら、西風の吹く暮れ方の町をYの許へ辿りついた。

「折角訪ねて來て貰つても、こんな身分ぢやどうすることも出來ない。まあ一日二日はお店の方

へもお願ひして置くから、俺の室へ泊つて居るが宜い。そのうちにちづかや(口入業)へでも行つて、ゆつくり奉公口を探すがよい」

Yは親切に云つて呉れるやうなものゝ、それは一日か二日の氣休めで、彼に取つては何にもならぬ親切であつた。けれどもそれだからと云つて其儘其處を去る譯にも行かない。云はれるが儘にYの仕事を手傳ながら二三日厄介になることゝなつた。

或る日彼は朝早く起きて水を汲んで居た。船から揚げられた荷は、裏の土藏へ荷馬車や荷車で運ばれて居た。店の人達は印絆纏を羽織つて菰包みを解いたり、箱の釘を拔いたりして居た。

「仕事のある人は嬉しさうだな」

彼は元氣よく働く人達が羨ましかつた。フト、彼の目に映つたのは空箱や繩の始末だつた、惜氣もなくプツリ〳〵と切られる繩、破れるのも構はずに壞はされて行く箱。

「勿體ないな」と思つた。彼は其處へ行つて手傳ふことを懇願した。少しでも遊びたい人達に異存は無かつた。彼は丁寧に箱や繩を始末した。今まで捨てゝしまふ繩屑や木の箱は相當の値段で賣れるやうになつた。彼はお茶受けにふかし藷だの鹽せんべいだのを買つて出した。店の人達は喜んだ。かうして一つの財源を得た彼は、自分から扶持代を拂つてYの寢床を借りて居た。

店の人達と知合になつた彼は、洗濯から使ひ走りまでしてやつて重寶がられた。或る日例のお茶受けを持つて店へ行くと、午後の陽のうすら眠い暖簾の下で、店の人達は算盤へ肱をついてコクリ〳〵やつて居た。

彼は三時の茶のみ話にこんなことを話した。

「私はお店の品を外へ持ち出して賣つて見たいと思ふんですが、如何でせう、私に脊負へるだけのものを一日貸して頂けないでせうか、保證金としては積まれませんが、其代り毎朝働きます」

すると、其中の手代らしいのが、

「面白さうだな、やつて見るがよい」

と、贊成して呉れた。彼は喜んで大きな風呂敷を一枚買つて來た。

其翌日から、彼は糶呉服となつて町々を歩いた。けれどもそれは彼れが考へて居る程容易な商賣ではなかつた。脊負へるだけ脊負つた荷物は可なりの重量があつた。軒から軒へ休むことさへ出來ない彼は、僅か半日でヘト〳〵になつてしまつた。

「何處かで休みたいな」こんなことを考へて裏通りの淋しい町を歩いて居た。荷の重みは彼の肩の骨を碎けるやうに攻めつけて居た。彼はたうとう堪らなくなつて、華客になりさうもない汚ない家へ飛び込んだ。

「誠に恐れ入りますが憚りを貸して下さいませんか」

休まして貰ひたい彼は、こんな嘘を吐いて、荷物を卸さして貰つた。彼は行きたくない便所へ入つて二三分間狂言を使つた。出て來て見ると、大勢の女の子が、彼の荷物を珍しさうに見て居た。彼は序でに荷崩れを直さして貰ふ爲めに其荷物の中〆めを解いた、中からは赤い布片だの、珍らしい柄の銘仙だの、紺の香の高い絣だのが顏を出した。其處のお神さんは、秋刀魚を嗅ぎつけた猫の鼻のやうな恰好をして側へやつて來た。

「いゝ柄ですね、目のお正月をやらして貰ひませうかね」

其中の一反二反を擴げて見た。そしてお隣のお神さんへも聲をかけた。裏の奥さんへも聲をかけた。みんな集つて來た。女達はとり〴〵な柄に誘惑された。子供達は赤い反物を引張り出して自分の袖へ當てゝ見たりなんかした。荷物はそれからそれへ擴げられて行つた。

彼は茲で初めて二三反の商賣をした。子供の多い家、見立はそれ程立派でなくとも、整然と片附いて居るやうな家、彼の目標はさう決つた。そして新らしい華客を開拓して行く彼の戰術は、必ず「憚り」を借りることであつた。一軒から二軒、華客は日增しに殖えて行つた。

「豪いもんぢやないか、このお爺さんが今日本橋で一と云つて二と下らない呉服問屋の開祖なんだ、ものゝ四五十年と經たないうちに、三圓の資本から、あれだけの身代にしたんだから、失業して居る人なんか考へることだね」

と、岡辰老人は下唇を嚙んで話を結んだ。

「作力時代の典範ですな」

私も感心せざるを得ない話である。

「そこで頭の働きと云ふものゝ貴さが判つて來るだらう、殊に競爭場裡に立つて、智慧を闘はすとなると、また一段と面白くなつて來る。一寸したことで素晴しく出世したある青年の話があるんだ、いゝや誰にも出來ることさ……」

黄金のジヤズ

遊んでる貯金

「晩飯の仕度なら構はんで置いて呉れ、今日は孫と約束があるんで、家へ歸つてから食べなければならんから……なに……とろゝ汁が出來るつて……？　それは殘念だな、しかし今日はお預けにして置かう」

岡辰老人は臺所へ立つて行つて妻君のうしろ姿を見ながら云つた。

「でも折角ですから……」

「いやく、構はんで呉れ、それが爲めにまた晩飯を炊かなければならないんだらう、無駄なこつた、これだから日本人は貧乏するんだね」

相變らず老人は口が惡い。

「俺はいつもさう思つて居るんだ。日本人の食物も、外國のパンのやうに一ケ所でこしらへて配達されるやうにしたら、手數と無駄がどれ程省けるか知れない。一軒々々別々に瓦斯を引いて飯を炊く、湯を沸す、お汁をこしらへる、隨分失費な話だ。第一メートル料一ケ月十五錢と云ふものが、一ケ年には一圓八十錢、東京市内七十萬戸としても百二十六萬圓と云ふものは空なものだ。これが一ケ所で飯も炊き、お汁もこしらへ、湯を沸かすと云ふ風にして、配け合つたら、大へんなことになるだらうと思ふね」

「さうなると便利ですな、第一女中の手が省けますから……」

「けれども日本人にはそれが出來ない。いつか米國人が浦賀船渠を見に來て、日本人には敬服した、船渠會社で釘まで作つて居ると云つて、褒めたのかくさしたのか判らないやうなことを云つて居たさうだ。全くその通り、戰爭でもあれば一致團結と云ふ素晴しい力を持つが、生活と云ふことになると、極端な個人主義だからね」

「痛烈な批評ですな」

「だつてさうぢやないか、あの郵便貯金を見給へ君、「貯金帳茲に年古る五十錢」と云ふ川柳があ

るが、五十錢を殘したまんまで忘れちまつて居る通帳が千八百六十九萬九千八百四十三冊もあるさうだ。これこそ据置にしたつて利息がつくぢやなしさ、殆んど權利拋棄のやうなもんだ、此金額驚く勿れ九百三十四萬九千九百二十一圓五十錢ぢやないか、この金を一纏めにして融通さして呉れゝば、年五分に廻したつて四十六萬七千四百九十六圓七錢五厘になる。大きなものぢやないか、別々な人のふところから出て居る五十錢だが纏つて來ると遊ばして置く位の働かせかたでも一ケ年で富豪の仲間入りだ」

「へえ……？　恐ろしいもんですな、しかし其金はもう下げられないんですか……」

「いや、下げられる、解約をすれば宜いんだ、しかし其手續きが面倒なもんだから、其儘拋つて置くんだね」

「それをうまく生かす方法はないもんでせうか」

「あるさ、しかも簡單な方法である。それを生かすには其千八百六十九萬九千八百四十三人の人が貯金を初めれば宜いんだ。月に五十錢づゝにしても活動して來ると、此金がみんな生きて働く」

「なる程、さうですな」

「だから貯金をする時は、よほど考へてやらないと、かうした死金が出來てしまふんだ」

「全くですな」

「そこでこんな話がある、借金をしながら、利息が貰へると云ふんだ」

と、岡辰一流の話が口を切つた。

「それは耳寄りですな」

と私は膝を乘り出した。

返へさない無盡

「これはある月給取りの話だがね」

と、岡辰老人は坐り直した。

「其月の月給で一ぱい〳〵の生活をして居る月給取りで、恐ろしいものは家庭に起る不時の物入りだ。子供が生れる。病人が出來る。若干かの金は必ず出る。晦日の拂ひを一月延ばす、まだそのうちは宜いやうなものゝ、二月三月となつて來ると稍々破綻に近づいて來るね、會社の前借だ

つて其月以上のものは出來ないしさ、さればと云つて子供が生れたから月給が上ると云ふのでもなし、ボーナスまで辛うじて漕ぎつけて、漸く切拔けるとしても、また初まつて來る。月給取りなんてものはまるで恐慌と同船して居るやうなものだ」

「少し當てられますな」

「いや、ほんとうだよ、そこで天引貯金だの、つもり貯金だのと妻君がいろ〳〵工夫しては見るものゝ貯金よりは出金の方がいつも多いに極つて居る」

「實際ですな……」

「そんなに感心しちやつちや不可い。そこで其男は、同僚十二人と語らつて、一ケ月十圓掛け百二十圓取りの無盡をこしらへたものだ、共濟會とか何とか美しい名前をつけて……」

「何處でもよくやることですな」

「ところがこれがまた餘り思はしい結果にならないんだ」

「どうしてゞすか」

「それは其筈さ、一ケ月十圓掛けなら、百二十圓取るには、毎月一本しか當り籤がない。それを十二人共に欲しいんだから困るぢやないか、そこでせりをやるんだ、甚だしい時は百圓から九十五圓位までせつて落す人が出て來る。其差額はお茶菓子料として花くじをこしらへ十二人に戻してやる。一等三圓二等二圓といふ籤でね……」

「それもよくやりますな」

「すると滑稽な話ぢやないか、十二ケ月共に糶無盡になつてしまつて、花籤はコーヒーになつたり鰻丼になつたりして正味は百圓平均になつてしまつた。何のことは無い二十圓のコーヒー代だけが無盡の特點見たいなものだ、そして百二十圓の金は百圓にしか使へないことになつてしまつたのさ」

「つまりさうですな」

「そこで其男は氣がついたんだね、これでは不可い。これは百二十圓取ると云ふ目標があるから結局奪ひ合ひになつてしまふのだ、いつそ返へさない無盡を一つ作つて見ようと云ふので、滿會の日に改めて十二人の會員に相談したものさ」

「返へさない無盡と云ふと……」

「積みつばなしさ、しかしそれには出來るだけの範圍でなければならないと云ふので、月給の一割を積立てることにしたんだね」

「なるほど……」

「それが種錢さ、一年ばかり其儘にして置くとそれが千五百圓ほどの金になつた」

「豪儀なもんですな」

「そこで其男は會員を集めて、何か家庭で不時の入用があつた場合は、掛金の範圍で貸し出す。利子は銀行利子でよい。そして其利子は積立て置いて毎年一回會員に拂ひ戻す、つまり借りた人も其利益の配當を受けるのだから、利子の戻しを貰へるのだと云ふことを云ひ渡したんだ。すると不思議なもんぢやないか、無盡の時は見す〳〵損をすると云ふ事を承知で辷り落したものが、利息を拂はなければならないとなつたら、誰も借りようと云ふものが無くなつてしまつたんだ」

「人情ですな……しかし借り手がないと銀行に死藏されてあるも同樣ぢやありませんか」

「つまりさうだ、そこで考へたのが其金の運用法さ……」

と、岡辰老人は下唇を甜めた。

大きな利己主義

「運用法は別問題としても、此際の月給取りには宜い手本ですな。減俸案が撤回されたんですから、減俸されたと思つて一割の積立位は出來る筈です」

「その通り、しかし金は運用するものに出來て居るんだから、出來るだけ働かすがよい」

「それに越したことはありませんが、今のところでは株も社債も安定して居ないやうですから、うつかり投資は出來ませんな、それかと云つて地所は確實性を持つて居る樣なものゝ高過ぎるやうだし、家屋は空家だらけですからうまく行くまいし、いつそ此場合は現金で握つて居る方が賢明ぢやないでせうか……」

「なあに、働かす道は幾らでもある。第一其男のやつて居る仕事なんかは、最も確實な方法だ」

「へえ……？　債券の鞘取りですか……？」

「いや、そんなぢやない。手形の日歩取りだ……」

「手形つて……？　約束手形ですか、少し冒險ですな」

「それが冒險ぢやないんだ、最も安全な方法だ、けれども制限があるんで、今では其他にもう一つの事業　事業と云ふ程でもないが、うまい金儲をやつて居る」

「はゝあ……この行詰つた世の中でね……？」

と、私は期待に胸が躍つた、岡辰老人は口元に微笑を湛へて、

「大きな傘をさせば、どんな雨が降つても濡れる心配はない、と云へば子供騙しのやうな話だが、自分の勤先が大きくなれば、自分も大きくなれると云ふことを前提にしないとこの仕事は出來ないんだ。昨年亡くなられた富士製紙の穴水要七と云ふ專務取締役がよく云つて居たね。よく世間では社本位に働くと云ふやうなことを云ふ人があるが、それはみんな嘘だ、人間はどんな場合にも自分本位でなければならない。自分は明治四十一年に富士製紙の營業部へ入つたが徹頭徹尾自分本位で働いた。何とかして自分を大きくしたい、どうにかして出世したいと明け暮れ考へて居た。それにはどうすれば宜いか、それは此社を絶對に信用して大きくすることだ。此社が大きくなれば自分も大きくなる、彼は獻身的に働いた。そして月給の一部分を積立てたり、ボーナスの全部を使はずに富士製紙の株を買入れた。明治四十二年、時の内閣の消極政策に依つて、財界は極端な不景氣となり、富士製紙の株なども五十圓拂込の株が二十二圓、二十五圓拂込の新株が四圓九十五錢と云ふ安値に慘落した。會社の實況を知つて居る彼は、こゝが買ひ時だと云ふので、其株を買つては擔保として金を借り出し、其金でまた買入れては擔保とし、また買ふと云ふやうにして六百株からの株主になつた。さうなつて見ると雇はれて居るやうなものゝ自分の會社と同樣である。自分だけが働くのでなく、他の社員の分までも働いてやると云ふ大勉强、更に十年一期として株を增加し、遂には十五萬株からの大株主となつてしまつた。これなどは自分本位が結局社本位になつた實例で、月給取諸君には好いお手本だと思ふね」

「宜い話ですな」

「ところが其男の勤め先は株式會社でないんだ、だから株を買入れる譯には行かない、そこで彼れの目をつけたのが、其社の信用と云ふことだつた」

と、岡辰老人は明るい顏をした。

三割三分の利益

「その社の信用と云ひますと……」

「その社から發行される約束手形へ目をつけたんだね。商取引に用ひられる約手と云ふ物は、信用と信用との取引で、多ければ多い程其社の盛大を物語るものである。孰れも取引銀行があつて其手形を割引いたり、交換したりする事務を扱つては居るが、中にはそれほど大きな取引でない出入り商人が居る。これ等は銀行へ行つて特別に扱つて貰ふか、金融業者のところへ行つて、相當な日歩を拂ひ、割引して貰つたりして居る、それを此組合でしてやるんだね。今のところ銀行では百圓に付一錢八厘から二錢位の日歩を取つて割引する、それを其組合がやれば銀行へ拂ふだけの割引料が其組合の利益になる譯だ。發行者は自分の勤めて居る會社だし、相手は出入りの商人だし、便利と奉公を兼ねた立派な仕事だ」

「なるほど、社員が自由に割引いてやるほどの手形なら取引するものでも安心して商賣が出來ると云ふものですな」

「その通り、社員が其社の事業を裏書して行くやうなものだからね」

「どうせ銀行へ支拂はねばならぬ割引料だから、相手としても別に之れに依つて別な支出がある

と云ふのでなし……うまい方法ですな」

「ところが、積立が積立だからさう大袈裟にも出來ない。程度を超えることが出來ないんだからね。しかしさうやつて二錢の日歩でも年利にすれば七分三厘にも廻るんだから、從つて配當も七分三厘になる譯だ、斯うなると人間と云ふものは慾が出て、毎月の掛金は、滯りなく拂ひ込まれる。資本はだん〳〵に增加して行く、誠に順調なんだ」

「さうでせう。張合ひがつきますからな」

「さうなつて來ると、もつと有利なものは無いかと考へて來るのも人情だ。彼はまた一つ發見した。これは今では立派な商賣になつて丸ビルで堂々とやつて居るが、最初は此男が考へたと云つても宜い位だ」

「商賣ですか」

「いや、商賣ぢやない。其社に勤めて居る社員達の爲めに便利を計つたのが原因さ」

「低利資金ですか……」

「さう云へばさうも云へるが、省線電車の定期乘車券、そのパスを利用するものが其社だけで五

十人からあると云ふのだから、郊外が發展する譯だね」
「月給取りなんて云ふものは家賃に重大な關係がありますからね」
「さう〳〵郊外居住者はパスが米に次ぐ重要なもんだからな」
「そのパスをどうするんです」
「このパスは一ケ月、三ケ月、六ケ月、一ケ年の四通りに別けられてある。俺のところでは一ケ月のだが、毎日通勤する人は一ケ年の方がずつと安くなつて重寶なんだ」
「しかし一ケ年は一時に金が出るんでせう」
「そこだよ、此男の着眼は……、いま假りに東中野から東京驛までの賃錢を示すと、

一回片道分	十五錢	往復すると	三十錢
一ケ月廿五日として	七圓五十錢	一ケ月のパス	五圓
三ケ月のパス	十二圓	六ケ月のパス	十八圓九十五錢
一ケ年のパス	三十六圓		

となるから、一ケ月より三ケ月の方が安く三ケ月より六ケ月、六ケ月より一ケ年の方が安いのは一目瞭然だ、ところが一ケ年のパスを買ひ得る人は多少とも餘裕のある人で、月給が右から左へ消えてしまふやうな人には及びもつかないことだ」
「全くですな、金持ちには都合の宜い制度に出來て居る……一寸社會問題ですな」
「その通り、一ケ年のパスを買へば二十四圓も助かるのだが、それを知りつゝ一ケ月五圓のパスで我慢して居る人が多い。其處で此組合が活動する餘地が出來た譯さ……」
一服吸ひつけた老人の鼻の穴から紫の煙が二本出た。

團結の威力

それは一ケ月のパスで五圓づつ支拂つて居る人達に一ケ年のパスを買つて貸しつける方法である。現在丸菱商會と銘打つて立派な營業になつて居る程である。それを一つの會社内で何十人何百人と居る郊外居住者だつたら、會社そのものが便宜を計つてやるも宜いことだ、と岡辰老人は精細な計算を取り初めた。
「一ケ月五圓のパスを四圓の月賦拂ひにして一ケ年分のパスを買つてやると、パスの使用者は一